

【加藤九祚先生を偲んで】 ソグド人同様コスモポリタンだった加藤九祚先生に捧ぐ

## 心はいつも旅する

生きるというのとはにかくいことだ (ゲーテ)

# 「タジクの黄金遺宝日本語版」

## 別冊特集

—シベリアから南下、アルタイ山脈、天山山脈、パミール高原山麓で考古学的発掘に挑戦・著書多数—

- 1922年5月1日 韓国慶尚北道で生まれる。
- シベリア抑留 (シベリア留学 1945～1950年)
- アルタイ山脈でパジリク王墓発掘、アフアナシェヴォ古墳発掘
- 天山山脈でクラスナヤレーチカ遺跡を発掘
- スルハンダリヤでクシャン朝 (1～3世紀) のダルヴェルジンテパを発掘、テルメズでカラテパを発掘
- 2016年9月12日、カラテパ遺跡発掘中に逝去
- 晩年7月7日、元タジキスタン共和国外務大臣、元駐日大使ハムロホン・ザリフィ氏と面会「タジクの黄金遺宝」日本語版発刊を約す。

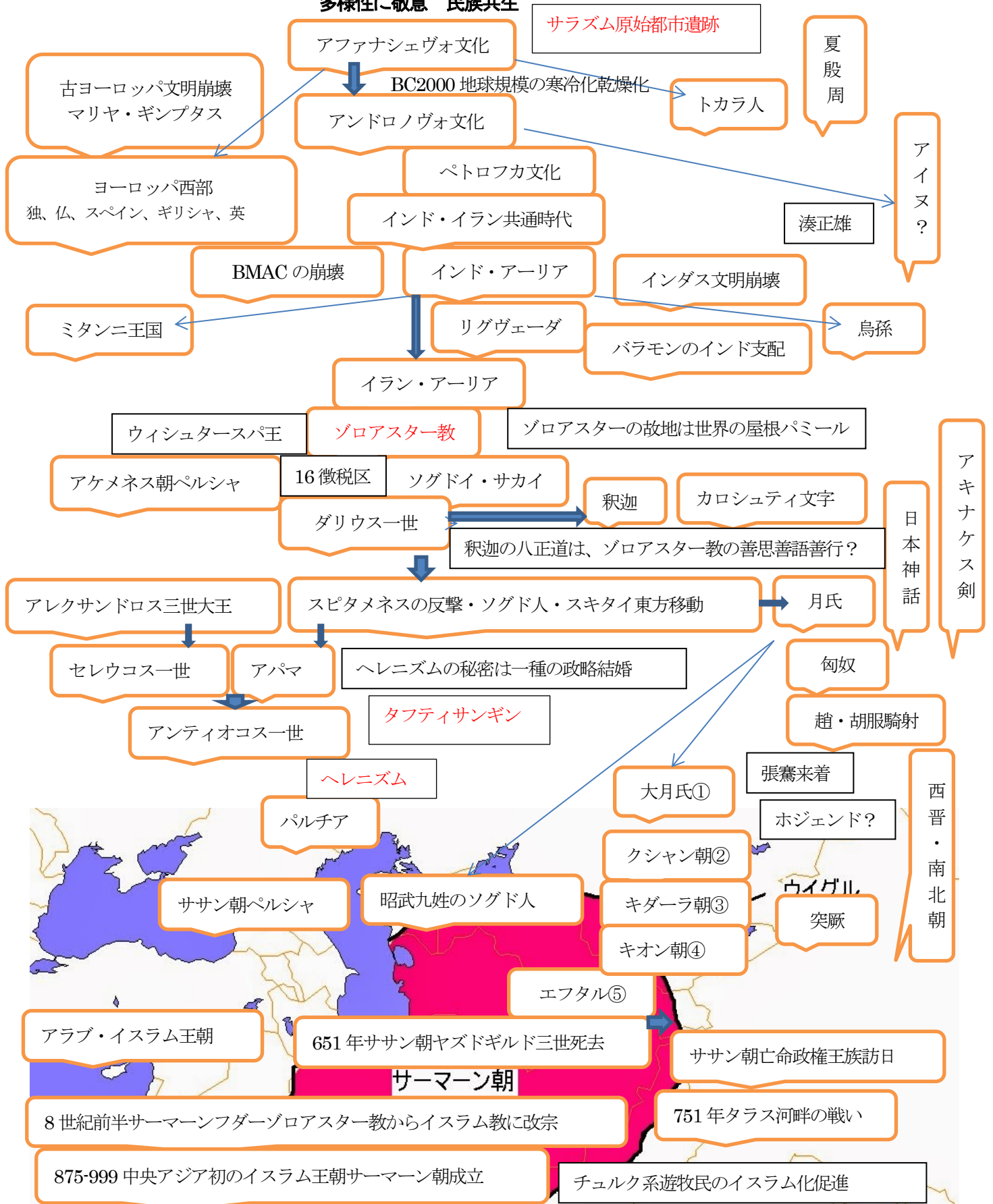


### ソグド人と後継者タジク人

パミール高原を水源とし、アムダリヤに合流、カスピ海に注いでいたソグド川 (ザラフシャン・黄金の水しぶき) 沿いを中心に大シルクロードをつないだ。アケメネス朝ペルシャのアラム語を基にしたソグド語が交易言語となり、その後突厥第一可汗時代の公用語、ウィグル文字、モンゴル文字、満州文字が誕生。ゾロアスター教を信じ、大乘仏教を受け入れ、中国、日本に伝えた (鑑真と共に来日し唐招提寺住職となった安如宝もソグド人)。ゾロアスター教からイスラム教に改宗したサーマーン・フダー (ソグド語で領主サーマーン) 以降タジク人と呼ばれる。



大野遼の妄想中央アジア系統樹 「無いものを補い合うのがシルクロード」(加藤九祚)  
多様性に敬意 民族共生



※①～⑤はパミールからバダフシャン/ワハン回廊を中心とし 2～8 世紀にかけて中央アジアを支配したキルバンド王国の王朝名。カニシカ王は 4 代目のキルバンド王とする 500 年続いたキルバンド王国の王朝交替という考えが『アイハヌム 2004 加藤九祚一人雑誌』133 頁「中央アジアの謎の王国キルバンド」で紹介されている。日本(扶桑国)同様、ソグド人の「ミル(太陽)の王国」かも知れない。大乘仏教形成の背景にある。

この「タジクの黄金遺宝」日本語版発刊記念特集号を、2016年9月12日、ウズベキスタン共和国テルメズ市の仏教僧院カラテパ遺跡発掘中に逝去した加藤九祚・国立民族学博物館名誉教授（特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ名誉会長）に捧げます。またお会いし、一杯やりましょう。

今回、「タジクの黄金遺宝」と題して発刊されたタジク（人）は、タラス河畔の戦いの後、中央アジアで最初のイスラム王朝として誕生したサーマーン朝を形成した人々の呼称である。実に広大な帝国であったが、その誕生は、ソグド語で「領主サーマーン」の意味となるサーマーン・フダーが、ゾロアスター教からイスラム教に改宗したのをもって始まる。サーマーン朝は 892 年ブハラを首都としたイスマイル・サーマーニーの頃から全盛期を迎え、999 年まで続いた。ソグド人は、今やタジキスタンの首都ドゥシャンベから北約 80 キロのヤグノブ渓谷に暮らすヤグノブ人が子孫であると伝えられ、人口わずか 2 万 5 千人（22 村）。私が加藤九祚先生から受けた薫陶の心は「多様性に敬意」「民族の共生」。ユーラシアンクラブ創設の志であり、人類史に未来があるかどうかを左右する試金石だと考えて、ユーラシアンクラブを通して、「理解、親睦、協力」を模索し、活動は 30 年に及んだ。世界は、少数民族、先住民族がいて今があるというのが真実だと確信している。「少数民族、先住民族への理解と敬意」は人類の未来を考えると最低限必要な態度であると考えて。ヤグノブの人々がこれからも自負や誇りを胸に幸せに生きることを心から願う。

日本列島と日本人の今を考える時に、ヤグノブ人とタジクの祖先であるソグド人と日本人の昔を考えてみることは、少しは意味があると思う。この文書はほとんど妄想に近い世界を含むが、大野遼が北方ユーラシア学会の創設に参加し、民族の共生を願いユーラシアンクラブを創設して、アルタイ山脈、シベリア、中央アジア、ウイグル、モンゴルそしてアムール川下流を訪ね、海の向こう、大陸から日本を見る「アジアの眼」に映っている幻想の一部だと理解してもらって結構である。

大野遼は若いころ、かみさんと婚前旅行でバイカル湖を訪ね、ロシア人と格闘技（私の柔道とソ連のサンボ）をし、後に考古学者の加藤晋平氏と大阪医科大学の松本秀雄学長のバイカル起源論がよく似ていたことに驚き、イルクーツク大学のゲルマン・メドヴェージェフ教授から、「かつてバイカルの水は、アムール川に流れ、ハンカ湖経由ウスリー川に流れ、日本海に注いでいた」と聞き、ウラジオストクのエルンスト・シャフクーノフ教授が「ウスリースク近くにソグド人の集落があった。中央アジアと極東はテンの道でつながっていた」と語るのを聞いたり、アルタイ山脈のデニソフ洞窟前でデレビヤンコ氏から 4~5 万年前にさかのぼる中央アジアと日本列島の人類交流史への情熱を聞いたり、そして自分でも考えてきた。これは中央アジアの北に位置するアルタイ山脈—バイカル湖—アムール川—日本列島とつながる「アジアの眼」を涵養することになった。これは、私が高校二年生の時、川越駅前の書店で『シベリアの歴史』を手にとって以来

特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ 会長 大野 遼  
加藤九祚先生の背中を見ながら体験したことの一部である。

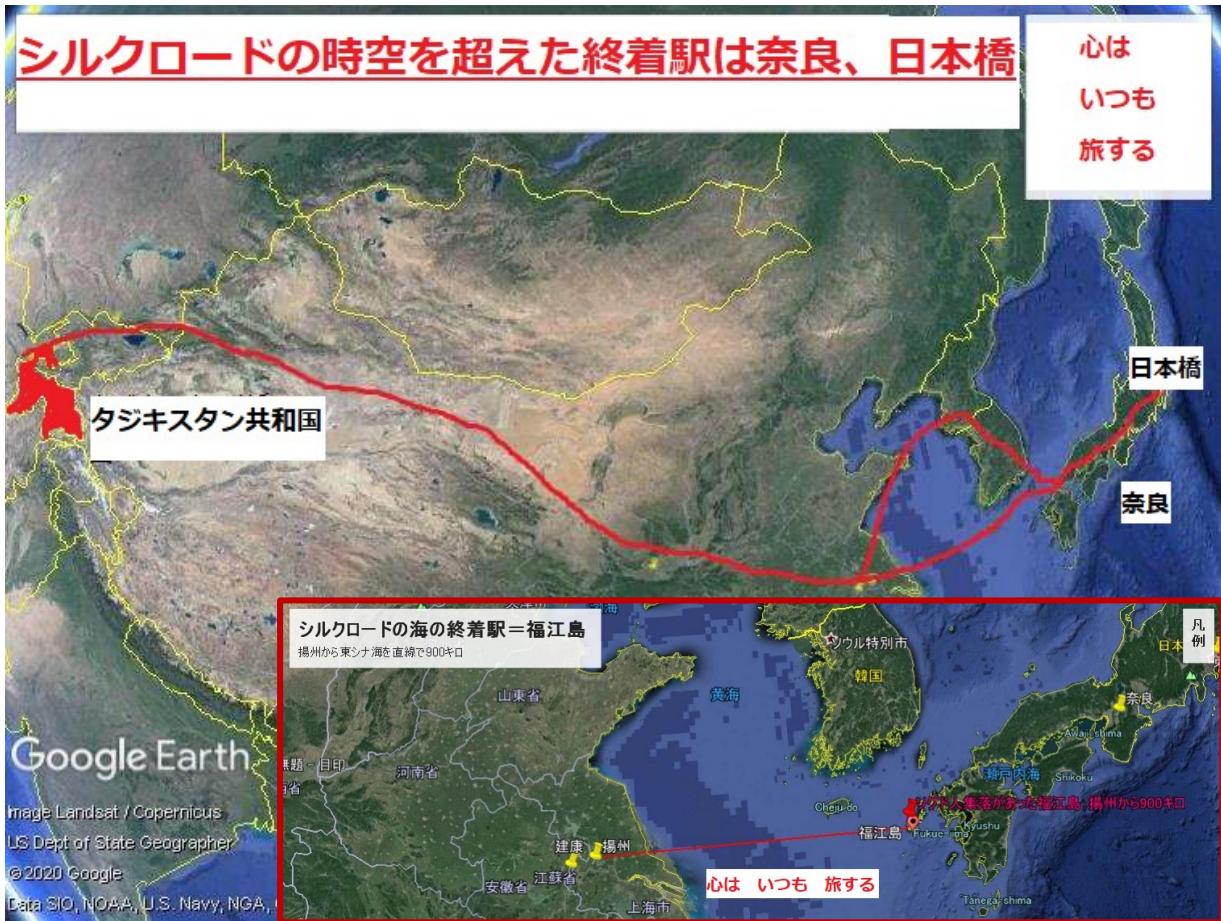
加藤先生はシベリア抑留を「シベリア留学」と考え、ドイツ語の代わりにロシア語を極め、文献を渉猟し、日本や旧ソ連の多くの学者と懇意となり、国立民族学博物館名誉教授、ロシア科学アカデミー名誉歴史学博士であり、大佛次郎賞、南方熊楠賞も受賞する文献学者であるが、アルタイ山脈でアフアナシェヴォの古墳を発掘（大野遼も参加）してから、アルタイ山脈から中央アジアに南下、キルギスで仏教遺跡クラスナヤレーチカの発掘、ウズベキスタンでダルヴェルジンテパ遺跡、そしてカラテパ遺跡の発掘調査に着手、考古学者に転身した。今回の特集は、加藤先生の考古学者時代に、大野遼はNPOユーラシアンクラブを創設し、アムール川下流のナナイ人の村をはじめ、極東ロシアの先住少数民族村の振興にかかわりながら、中央アジアの文化理解促進の活動を進めていた頃に知りえたことが基礎になっている。

1994 年、旧ソ連が崩壊し、中央アジア諸国が独立し、まだ国境整備も進んでいない中央アジアの最後の「自由旅行」をしようと加藤九祚先生のお誘いでタシケントで旧ソ連製の乗用車をチャーターし、元 KGB のガードマンの協力を得てウズベキスタン、キルギス、カザフスタンを自由に出たり入ったりする旅行を行ったことがある。中央アジア諸国では、ロシア語が分かっても話さない雰囲気があふれ、ウズベキスタンその他から多くのロシア人がロシアに「帰国」するような時代の空気だった。「新しい国境」に向き合いながら、こうして「新しい国家」と「新しい国民」が形成されるのを実感した。ユーラシアンクラブの「国家民族宗教を超えて」というスローガンの大切さを実感したものである。この特集は、文字通り「国家民族宗教を超えて」活動していたヤグノブ人とタジク人の祖先ソグド人と、日本の歴史文化の形成とのかかわりに思いを致し、加藤九祚先生（九さん）の遺言を実行した、妄想の一文である。九さんの冥福を祈ります。

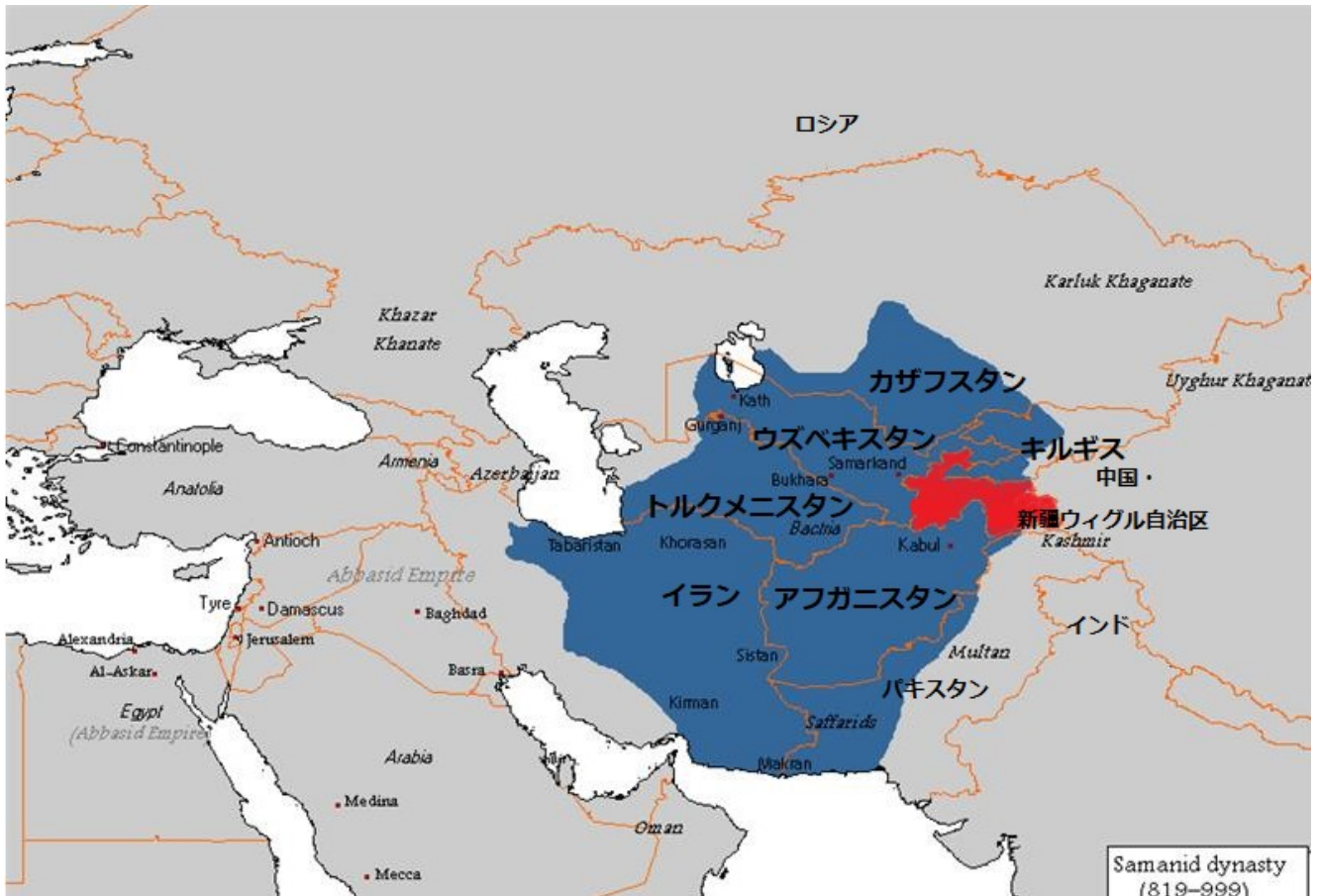
国家民族宗教の境を超えて、少数民族、先住民族にウェートを置いて、民族の共生、自然との共生を模索する。多様性に敬意を。これが九さんの思いであり、大野遼が創設したユーラシアンクラブの目的である。『タジクの黄金遺宝』日本語版発刊に合わせ、タジクとヤグノブの祖先となるソグド人に思いを致すことは、九さん、大野遼、江藤セデカ理事長をはじめとする仲間が共有するユーラシアンクラブ設立の趣旨にかなうと信じている。



【シルクロードの時空を超えた波動】



【タジキスタン共和国 (赤) とサーマン朝 (青)】



## 【アジアの基層文化にタジク、ソグドらペルシャ系文化が存在した】

NPO ユーラシアンクラブ会長 大野遼

ミフル・ミスラ（ミトラ；弥勒菩薩の起源）が待つ『太陽の足』（日が昇る）世界の屋根パミール（タジク語）

タジキスタン共和国パミール：ゴルノバダフシャンは太陽神ミフルが潜むゾロアスターの故地か？

### ○ ヒマラヤ・パミール高原はソグド人の故郷

タジク人、タジキスタン共和国と言って、どんな人であり、どこにある国かわかる日本人は少ない。しかし、その先祖がソグディアナやバクトリアと呼ばれた中央アジアに位置し、アレクサンダーが東征の末に至り、ソグド人の激烈な抵抗で中央アジアから撤退し、クシャン朝で大乘仏教が東遷し、中国経由日本まで達する重要な契機を作ったソグド人の後継国家であるといえ、多くの人がその重要な意味に気づくに違いない。

タジキスタン共和国は、天山山脈の南西、フェルガナ盆地の南に位置し、ヒマラヤ・パミール高原の西麓にある山がちの、中央アジアの水源となっている国である。山がちの日本によく似た自然環境も存在する。中央アジア最大の河川アムダリヤ（ギリシャ語名でオクサス）の北部にあって、南はアフガニスタン、パキスタン、インド北西部に連なり、西はウズベキスタン、トルクメニスタン、北はキルギス、カザフスタン、東は中国・新疆ウイグル自治区のタリム盆地につらなり接している。

タジキスタン共和国には、ソグド州が、首都ドゥシャンベの北西を東西に流れるゼラフシャン川（ザラフシャン、別名ソグド川）の上流域に広がっている。ソグド川の下流には、ウズベキスタンのサマルカンド、ブハラがあり、多くのタジク人が暮らしており、ソグド川はかつてアムダリヤに合流していた。さらに言えば、アムダリヤは、現在はアラル海（水資源の枯渇で極端に縮小）に注いでいるが、かつてはケリフと呼ばれる地点からカラクム砂漠を西進し、カスピ海に注いでいたことが知られている。4000年前以前、おそらくソグド川とアムダリヤの合流点あたりから川が西進しカスピ海に注いでいた時期に、繁栄したのが、今世界で注目されているバクトリア・マルギアナ考古学複合と呼ばれる古代遺跡群だと想像される。その頃の寒冷化乾燥化に伴い流路は変わったとみられる。同時にその頃北西に栄えていた二輪馬車を使用したアンドロノヴォ文化の人々が南下した。アンドロノヴォ文化の人々は、東西にも移動した。

### ○ 中央アジアの基層文化の一つはペルシャ；サーマーン朝がタジキスタン共和国の祖先

日本人が、西アジア特に中央アジアそして日本を含めた極東の歴史文化を見るときに欠かせない視点の一つは、ペルシャの文化が基層文化を形成しているということだと思ふ。かつて紀元前3世紀に匈奴が勃興する以前の、今の西トルキスタン、東トルキスタン地域の住民は、東ペルシャ系（イラン系とも）の人々であったと考えられている。これらの人々は、系譜の基層にアフアナシェヴォ文化の人々が存在する。私は、加藤九祚先生と一緒にアフアナシェヴォ文化の古墳をアルタイ山脈で発掘したことがある。アンドロノヴォ系ペトロフカ文化の人々が、南下しバクトリア・マルギアナ複合と呼ばれる文化を滅ぼし、のちにインダス文明をも滅ぼし、インドでリグヴェーダを生み、カースト制度を作ったのがインド・アーリアで、これを目の当たりにしたイラン・アーリアの間から「善思善語善行」を掲げる善の宗教ゾロアスター教が生まれ、アケメネス朝ペルシャが誕生した。日本では、日本列島の先住民アイヌの形成はアンドロノヴォ系の人々に遡り「白人を祖系としてアジア人の血が多量に流れ込んだ集団」という考えもある（『アイヌ民族史と知里真志保さんの思い出』湊正雄）。中国で夏殷周が形成された時期のことである。大河流域で文明を形成した農耕集団の周辺で、金石併用時代から青銅器時代に、鉱石を採集して交易に参加した牧畜民、馬車からのちに騎馬民族化したアンドロノヴォ文化系アーリア、「インド・イラン系アーリア／アーリヤ（イランの語源）」と呼ばれるペルシャ系の人々が重要な役割を果たしていた。ソグドやのちにアラブのイスラム勢力に席卷されてササン朝ペルシャの人々と混淆してサーマーン朝を形成したタジクの人々の祖先は、中央アジアの人類史理解のカギを握っていると考える。

## ○ ヘロドトス「歴史」で「ソグドイ」、昭武九姓のソグド人の祖は月氏

アジア史、シルクロードの歴史文化史では、ヘロドトスの「歴史」に記されたアケメネス朝ペルシャの昔から、「ソグドイ」「サカイ」として東ペルシャ系の民族グループとして存在し、紀元前4世紀にはアレクサンダーの東征を遮った最大の勢力がソグド人であった。この時期に東方移動して河西回廊（甘肅省 Gānsù Shěng）の祁連山昭武城（中国甘肅省張掖市臨沢県板橋鎮）を拠点（最近は東天山第一種早期遊牧文化説/王建新も有力）の一つとして暮らしていたのが月氏と考えられる。月氏（Yuèzhī/Гэсси）は、その頃勃興してきた匈奴との戦いで天山山脈経由バクトリアに追われ、大月氏（большой Yuèzhī/Гэсси）と呼ばれ、5 翕侯（5Xīhóu）を抑えてクシャーン朝をつくり大乘仏教興隆の担い手となった。またゼラフシャン川沿いに落ち着いた月氏は昭武九姓と呼ばれるソグド人として東西交易に活躍する。ソグド人は、ウィグル人の興隆に先立つシルクロードの主役として活躍した。

タジク人やタジキスタン共和国の祖先にあたる民族や国家については、ソグド人と同時に、アムダリヤ川（ダリヤは川の意）南部のバクトリアやタリム盆地にいたトカラ人も知られるが、トカラ人は、ソグドと一緒に離散したスキタイ系の人々とは異なり、アンドロノヴォ系の人々の前に中央アジアからアルタイ山脈に暮らし東西に拡散したアフアナエシェヴォ文化の人々とみられ、紀元前2000年頃地球規模の寒冷化乾燥化に伴って南部や東西に拡散したアンドロノヴォ系の人々に吸収されたと想像される。サラズム原始都市遺跡の初期の冶金遺跡を遺した人がアフアナエシェヴォ文化の人々だった可能性がある。以後の歴史は、最初にアンドロノヴォ系ペトロフカ文化を継承するインド・アーリア系の人々、後にソグド川沿いのソグド人らイラン・アーリア系の人々である東イラン系の人々の歴史が続く。系譜がソグドや月氏の人々につながるクシャーン朝以降のバクトリア語も、東イラン語に属し、パシュトゥン語、ソグド語などと近縁関係にあるとされる。『タジクの黄金遺宝』で取り上げられている古い文化遺産は、マー・ワラー・アンナフル（ソグディアナ）やゼラフシャン流域を中心に紹介されていることもあり、このテキストでは、ソグド（人）やアルタイ山脈のスキタイ（パジリク文化の人々；サカ、サカイ）と呼ばれる東ペルシャ系の人々とササン朝がアラブ軍によって滅亡し、サーマーン朝以後西ペルシャ化し変容したソグド人＝タジク人について記す。特に日本を視野に入れた文化交流では、ソグド、スキタイが大きな意味を有しているからである。つまりタジク人の祖先と日本列島の古代史にかかわる情報について紹介する。アジアの基層文化に占めるペルシャの影響は大きな位置を占めており、中央アジア、シルクロード史においてもペルシャ特に東ペルシャ（イラン）の歴史を抜きに理解はできない。

## ○ サーマーン・フダーはソグド語で「領主サーマーン」；ゾロアスター教からイスラム教に改宗

中央アジアで最初のペルシャ系イスラム国家サーマーン朝形成の契機になったサーマーン・フダーは、ソグド語で「領主サーマーン」という意味になるという。アラブのイスラム軍と唐が中央アジアの覇権をめぐる戦ったキルギスのタラス河畔の戦い（751年）を境に、急速に中央アジアで進んだイスラム化の過程で、言語も西ペルシャ系（ササン朝/651年イスラムによって滅亡）のペルシャ語の強い影響を受けたとみられている。イスラムを起したアラブの人々は「大食（タージー）」と呼ばれ、ササン朝が滅び、中央アジアでペルシャ系のイスラム国家サーマーン朝を起こすと、突厥以降中央アジアに流入していたチュルク系の人びとから「タジク」と呼ばれたことで、その地域の人々の呼称がソグドからタジクへ移行したと想像される。サーマーン朝は、トルクメニスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン、カザフスタン、そしてタジキスタン、そしてイランの東方地域ホラーサーンを含め、広域を占めて、ペルシャ文学が興隆し、サーマーン朝の影響でイスラム化したのちのトルコ系諸国でのトルコ文学の基礎となった。サーマーン朝が東イランから西イランへの変容、アラブやチュルクのペルシャ化というべき変化を起こしていたのである。シルクロードの要となったソグディアナやソグド人、その後の中央アジア史を理解するためには、タジキスタンという国を知ることが絶対に必要である。

## ○ 宗教はイスラム化したが大アラブの文学はペルシャ化、チュルク諸国の文学にも影響を与える

現在ウズベキスタンは、トルコ系ウズベクの子孫が優勢なトルコ系国家と考えられているが、ブハラ、サマルカンドなどウズベキスタンの都市に暮らすタジク人はかなりの人数に上ると考えられている。

故加藤九祚国立民族学博物館名誉教授（NPO ユーラシアンクラブ名誉会長）は、『中央アジアの歴史群像』の中で、サーマーン朝のナスル二世の下で宮廷詩人として活躍したペルシャ(タジク)詩人のルダーキーについて、16世紀のアミン・アフマド・ラジの言葉として「(ペルシャ) 詩の旗がまちがいなく掲げられ、詩の世界が秩序づけられたのはサーマーン朝においてであった。この王朝の詩人の先導者はルダーキーであり、彼こそは自らの詩集をつくった最初のペルシャ人であった」と紹介している。例えば、15世紀の後半、チムール朝で古ウズベク語の詩歌文学の新境地を表したと評されるアリシェル・ナヴァイー（1441-1501）は、ペルシャ詩の土壌の中でチャガタイ・チュルク語で抒情詩、叙事詩、散文を書き、中央アジアチュルク系文学の祖となった。サーマーン朝では、アッバース朝にアラブ語に翻訳されたアリストテレスの著作に影響を受け、ペルシャ語を使用した大詩人であり、哲学、医学、数学、法学、論理学、天文学、地理学、植物学、鉱物学まで幅広い分野で活躍した百科全書的の大学者イブン・シーナ（アヴィケンナ/980-1037）。そしてアラブの政権下で醸成された、日本の古事記と比較されるペルシャ建国の王統物語『シャー・ナーメ *Šāh nāmah*』を、フェルドゥーシー(934-1024)がサーマーン朝でまとめ、それはガズニ朝に献呈され、現在イランで一節が暗唱される歴史文学書となっており、中央アジアから西アジアの基層文化に、サーマーン朝時代に形成された東ペルシャ系の歴史文化が投影されている。サーマーン朝で最高の知識人と評されるのが、973年生まれのビールーニー。アラル海の南で生まれ、サーマーン朝のマンスールの庇護を受けていたが、最後はガズニ朝のスルタンマフムードの捕虜としてガズニ送られてインドの科学に触れ、1000年「古代の諸民族の年代学」、1029年「占星術教程の書」、1030年「インド誌」、「マスウード宝典」などギリシャ、アラブからイラン、インド、を視野に入れ、天文学を含めた百科全書の著作を残している。

中央アジアの歴史文化の骨格が形成されたのは、サーマーン朝の時であった。タジキスタンは、サーマーン朝の後継国家である。

## ○ アジアの音楽は、イスラム世界でペルシャ化

また世界の民族音楽を研究した小泉文夫・元東京芸術大学教授は「西アジアの音楽は、今日、イランの音楽、トルコの音楽、アラビアの音楽、そして、イスラエルの音楽と大きく四つに分けることができるが、その大部分は古代のペルシャの音楽に源を発しており、国際的な民族間の交流によって相互に音楽文化を発展させてきた」とし、トルコの音楽で使用される楽器や理論の用語に、ほとんどペルシャ語が使用され、アラブの音楽の多数の文献がその源をペルシャに求め、ペルシャの学者たちがアラビア音楽の成立に多大な功績を残している、と指摘している。象徴的に言えば、ササン朝ペルシャ以前から発達してきた古代ペルシャの音楽を構成する楽器群や旋法が、西方では、トルコ、アラブ世界といった西アジアの音楽の基礎に影響を与え、東方では、中国や朝鮮、日本の音楽を形成しているともいえる。

「今日、西アジアでもっとも広く用いられているウード（ヨーロッパのリュート、さらにギターへ発展していった楽器の祖先にあたる）は、アラビア人が工夫し完成したものと考えられているが、その源流は、ペルシャのバルバットという楽器にある。・・・アラビアの代表的楽器も、実はペルシャに源を発しているのである」（小泉文夫『民族音楽の世界』）

テルメズ近郊アイルタム出土の楽人像「曲項四弦琵琶を弾く女性」



○ 江戸歌舞伎の三味線は、ペルシャのバルバットの系譜とモンゴルの三弦の系譜が澤住検校の掌で合体  
日本の琵琶【曲項四弦琵琶】もペルシャのバルバットが起源で、西アジアのウードとは兄弟の楽器である。  
その最古の発見例は、ウズベキスタン南端、テルメズ市の東方、アムダリヤ北詰アイルタムの仏教僧院遺跡で発



見された楽人像「琵琶を弾く女性」の石像である。【曲項四弦琵琶】は、北宋の「事物紀原」に「碎葉所献」と記されている。5世紀後半から7世紀にかけて、エフタルそして西突厥が中央アジアを支配した時期に、ソグド人の手で、キルギスのトクマク市にあった碎葉城（西突厥の王庭）を經由して、中国の隋唐では「皇帝の楽器」として知られ、遣唐使を通して日本に伝わり、雅楽の琵琶、そして剣無き天皇の琵琶、盲僧の平家琵琶などに継承され、薩摩琵琶はアジアで最古となるペルシャ系のクラシックな楽器となっていることが知られている。このことは大野遼の連載「アジアの眼 アジアの音楽史『江戸歌舞伎はチンギスハーンがいなかったら誕生しなかった！？という物語』（ネット公開）で、江戸歌舞伎で使用されている三味線が、古代ペルシャの楽器バルバットを起源とし奈良時代に雅楽の琵琶として 1562 年まで琵琶の音楽史を刻み、ウイグルの楽器クーブーズを起源とし、元朝で誕生した三弦が沖縄経由、貿易港堺に伝わった三線が琵琶法師沢住検校の手のひらで琵琶から三味線に替わる日本の音楽史があり、背景にアケメネス朝ペルシャに遡り、クシヤン朝、ササン朝ペルシャ、エフタル、西突厥、北魏、隋唐、元そして日本橋まで、時空を超えてつながるアジアの音楽史があったことを紹介している。

現在ウズベキスタンのブハラで「シャシマコム」、ウイグルで「12ムカム」、イラクのマカーム、トルコのマカーム、ダマスカス（シリア）のアラブマカーム、そしてイランのダストガフ、と呼ばれている音楽の森とも評される音楽の体系は、ブハラの「シャシマコム」がタジキスタンの音楽体系であることにみられるように、サーマーン朝に遡り、東西トルキスタンに影響を与えた結果と想像される。

○ 中央アジアのペルシャ系の系譜



タジキスタン共和国の成立の基盤となったサーマーン朝、さらにその基盤となったソグディアナ、サカ、バクトリア、マルギアナの地の月氏やクシャンが属する「ペルシャ系」とは、どのような系譜を指すのだろうか。

東ペルシャ系と言われる人々は、アンドロノヴォ文化に遡り、中央アジアに南下してきたインド・イランアリアを背景にすると想定される。最近の分子生物学の研究によれば、タジク人は、インド・イランアリア、アンドロノヴォ人の Y 染色体ハプログループの R1a 系統に属し、アフガニスタンのパシュトゥン人に近く、これに先立ち、上記したアフアナシェヴォ人やトカラ人が R1a に先立つ R1b 系統に属すとみられている。

大野遼は、加藤九祚先生の後をついて、アルタイ山脈でアフアナシェヴォの古墳を発掘したことがある。現在見えるところを言えば、「インド・イラン系」「アリア」あるいはアフアナシェヴォ文化を担った人々の後に続いたアンドロノヴォ文化の人々のうち、南下し、ゼラフシャン川流域を拠点としペトロフカ文化を形成し、戦車（チャリオット）を使い、のちに胡服騎射と表現された遊牧騎馬民族の祖となる人々がペルシャ系で、人種はコーカソイドに属するとみられるグループと考えられる。ちなみに「戦車」と呼ばれることの多い乗り物について大野遼は「現代でいえば農業用軽トラック」と評している。「黄金の水しぶき」の意味を持つゼラフシャン川（ソグド川）上流で採れる砂金や鉱石を運搬、交易に利用されていた作業車が起源と考えられる。ペトロフカ文化の頃、アフガニスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンにあった「バクトリア・マルギアナ考古学複合」という文化コンプレックスの人々はインダス文明に属する人々で、これを崩壊させたのは、アンドロノヴォ系ペトロフカ文化の人びとであった。これらの人びとは、「アリア」の中でもインドアリアと呼ばれる人々で、最終的にインドに定着しバラモン、クシャトリア（騎士）を中心としたカースト制度の支配層を構成した。

天山山脈をはさんで東方には、インドアリアに係累が繋がると想像される烏孫がおり、西方にあったミタンニのインドアリアと合わせ、先行アリアとしてのインドアリアとみられ、先発のインドアリアと後発のイランアリアの系譜が中央アジアに潜んでいることになる。したがって、インド・アリアのグループは東方へも移動し、中国の夏殷周の形成に影響を与えたと想像される。ゾロアスター教を創始したアリアであるゾロアスターは、後発のイラン・アリアで、ソグド人はその子孫であると考えられる。ペルシャは、イランアリアという狭義のアリアと想定される。

ソグディアナやパミール、バクトリア、マルギアナさらに遡ればカザフ草原からアルタイ山脈を舞台に活躍した東ペルシャ系民族は、時代を経るに従い、人と文化の接触を通して融合変貌し、さまざまな国家の形、民族の主張、宗教的表現を変えながら、中央アジアでは、中央アジアの基層文化という「母なる文化」というべき東ペルシャの文化遺産がタジキスタン共和国の言語、歴史、文化の中に継承されている。

## ○ トランスオクシアナ（マーワラーアンナフル）がソグディアナ

その中でも特に、アムダリヤとシルダリヤという中央アジアの二つの大河に挟まれた、中央アジアを西方から見て、トランスオクシアナ（アラビア語で「マー・ワラー・アンナフル」）＝「川（オクサス＝アムダリヤ）の向こう」と呼ばれた地域は、アケメネス朝ペルシャからササン朝ペルシャにかけて「ソグディアナ」と呼ばれていた。このソグディアナの中央を東から西に、パミール高原を水源とする中央アジアで三番目に大きな川・ゼラフシャン川（上記した通り、黄金の水しぶきもしくは金を分配する川の意）またの名をソグド川が流れている。この地域が最初に文献の上で知られるのは、ギリシャの歴史の父ヘロドトスの「歴史」にアケメネス朝第十六徴税区に記される「ソグドイ」。中央アジアでは、古くから栄えた地域で、アンドロノヴォ文化の流派、ペトロフカ文化の人々が、ゼラフシャン流域で、南方の BMAC（バクトリア・マルギアナ考古学複合）を視野に活動を始めていた。ドゥシャンベ北方に位置するソグド州西端のサラズム遺跡は、紀元前三千年紀から二千年紀のゼラフシャン流域の銅冶金の草分けとなった原始都市遺跡として、タジキスタン初の世界遺産に登録されている。ペトロフカ文化の人々（先行アリア＝インド・アリア）は、のちにソグディアナと呼ばれるソグド川（ゼラフシャン川）流域を中心として交易で活躍するソグド人揺籃につながる人々だと考えられる。（参考【アジアの眼

## ○ 東ペルシャ系ソグド人と日本；故伊藤義教、故岡田明憲、故菅谷文則の著作によって考えた

今回、ハムロホン・ザリフィ元駐日タジキスタン共和国大使（元タジキスタン共和国外務大臣）の『タジクの黄金遺宝』日本語版が発刊されるに当たり、ペルシャ人そして東ペルシャ系のソグド人と日本について紹介する。

日本では、従来「ペルシャ」伝来ということでササン朝ペルシャを念頭に考察されてきた宝物が、クシャン朝やソグド、エフタルという中央アジアの東ペルシャ系の系譜に属すると見直されてきている。奈良国立文化財研究所（当時）の影山悦子（現名古屋大学）の研究グループは「正倉院に伝わる大刀の佩刀方法には、中央アジアを支配したエフタルの影響が認められる」と指摘する。エフタルは、白いフンなど出自に議論がある。

日本のペルシャ学をけん引した故伊藤義教氏は、日本の飛鳥時代に、飛鳥寺（法興寺、元興寺）の寺院配置が北方の源泉から流下した地下水脈（カナート、カレーズ）が地の七洲で湧き上がるゾロアスター教の世界観が投影されていると考え、6世紀から7世紀の初め、飛鳥寺の造営に百済から送り込まれた工人の中に多くのペルシャ人がいることを指摘している。司馬達止 Дильтаб и Съяспан 一族、太丈羅末大 Тазарамид、白味淳 Паймизуне、麻奈文奴 Манахунбан らの寺工と呼ばれる寺院技術者ら。インド北西部のガンダーラ（ペシャワール渓谷）からカシミール（渓谷）がグプタ朝（320-550）からエフタル(450～562)によって奪われているが、エフタルはペルシャ（ソグド）系とも、トカラ系ともいわれ、北魏と交易している。大乘仏教の普及がインド人からペルシャ人（ソグド人）による形にウェットを変え、インド僧に加え、ソグド系の仏僧の活動が活発になったと想像される。司馬達止らの活動は、ソグド人の活動を背景としている可能性がある。

後にササン朝ペルシャの最後の皇帝ヤズドギルド三世がアラブ軍に追われて亡くなった（651年）後、息子のペーローズが唐の長安に亡命し、その宰領であった達阿（ダーラーイ Даррай）が娘とともに来日している（654年）（『ペルシャ文化渡来考』）。中央アジアのイスラム化によるササン朝ペルシャの滅亡と日本は直結していた。

日本の古代史に潜む、ペルシャについて、漢字表記から人名や職種名のペルシャ語原型を復元する、アヴェスター以来の古代、中世ペルシャ語に通じた故伊藤義教氏が考察を示した上記の著作の中で、明らかなソグド人としてもしくは従来はインド人として考えられていたがソグド人かも知れないと思わせる人が二人いる。「安如宝」と「実忠」である。

安如宝は、揚子江河口の商都揚州から天平勝宝六年（754年）鑑真に同行して渡来した。安如宝の安は、上記昭武九姓のブハラ出身者のソグド人の名前で、揚州にあったソグド人集落に暮らしたソグド人と考えられている。中国におけるソグド人は、アレクサンダーによる東征を避けて、天山山脈以東に進出し河西回廊の祁連山昭武城を拠点の一つとして暮らしていた月氏に遡る。後に月氏 Yuèzhī(Гэсси)を祖とする昭武九姓 Zhāowūjiǔxìng のソグド人として中国の南北朝時代以後、「河西回廊 Gānsù Shěng の酒泉、張掖。オルドスの原州（固原市）、内蒙古、幽州（北京）、長安、洛陽、益州（青州市、）揚州、福州、広州など唐の各地に及んでいる」（『シルクロード文化を支えたソグド人』菅谷文則、サンライズ出版）。

菅谷氏によれば、中国におけるソグド人は、ソグド人同士で婚姻し、ソグド人の暮らしを維持し、交易で入手した多種の物資を東方にもたらし、ゾロアスター教や仏教などを絆に交流を続けた。ソグド人には、生まれた子供に蜜を含ませ、手にコインを握らせるという習慣があった。安如宝は鑑真の渡航を助け来日したが、菅谷文則氏は彼の目的は商売であったと想像している。来日後鑑真の手で得度し、薬師寺の僧となり、後に唐招提寺に移り住職となった。安如宝が建立した金堂薬師如来立像の左掌から銅銭三枚が埋め込まれているのが発見された。安如宝が揚州のソグド人集落で子供のころ体験した習俗が、安如宝晩年の仏像に痕跡として残されたことになる。ソグド人安如宝を手引きしたのは福江島のソグド人ではなかったか？（最終項ソグド人集落考参照）

実忠は、天平勝宝3年（751年）、笠置山の洞窟で兜率天の常念観音院で疫病平癒を祈る十一面悔過行法が行われているのを目にし、翌天平勝宝4年（752年）2月1日に東大寺の二月堂で修二会を始めた。修二会は、現在「お水取り」として知られ、実忠自身が大同4年（809年）まで続け、以後今日（2021年）に至るまで1212

年間、途絶えることがなく毎年継承されている。世界でこんな行事はないのではないか。修二会は、旧暦の二月、新暦の三月、春分の日に合わせて行われる、ゾロアスター教以来知られるナヴルズの性格を有する春の祭りである。実忠は、インド人とも言われてきたが、ペルシャ学の泰斗、故伊藤義教氏は、「(実忠は) イラン系の人物」「インドの事情にも明るいイラン系人物」(『ペルシャ文化渡来考』ちくま学芸文庫)と提唱している。二月堂の西に位置する若狭井で「お水取り」に際して、若狭の遠敷明神から二流の地下水が通じ、二井から湧き出すとされているが、これはゾロアスター教で春分の日、ハラー山(アルブルズ)から「たぎり落ちる東西二流(滝; 大野遼)」が、地の七州の中央州で湧き出し、地を潤し民生を助けるという世界観に基づいている。中央州で湧き出したのは地下水「カナート」「カレズ」で、インド・イランアリアの時代に、ヒンズークシ山脈やホラーサーン地域で誕生したと考えられている。私は、「イラン系人物」とされる実忠はソグド人ではないかと想像している。そしてソグド川(ゼラフシャン川)の東端に位置するパミール高原には、ゾロアスター生誕地伝承を含めゾロアスターの足跡を示すとされる遺跡があるタジキスタン共和国ゴルノバダフシャン自治州がある。実忠は、809年まで二月堂の修二会を自ら主宰した後、後進がこれを引き継ぎ、これまで千数百年毎年お水取りは続いている。実忠は東大寺の大学の頭として810年、唐から帰国した(806年)空海(空海の師の一人は安如宝ともいわれる)を東大寺の別当に選任し、良弁が立ち上げた東大寺における華嚴経学の復興を目指した。実忠は、弘仁六年(815年)まで大学頭に留まっている(年齢85歳)が、東大寺の別当には就任せず、最後は不遇であったとみられている。実忠の本名は「ジユド」(異なる)「チフル」(種族)つまり中世ペルシャ語で「異邦人」という意味を漢字で音を当てたと、伊藤義教氏は想像している。東大寺の別当良弁は、752年東大寺大仏開眼法要のあと、聖武天皇から3年の休暇をもらい、故郷相模国に帰り、東丹沢に兜率天を構想し大山寺を整備し完成したのが755年。良弁の参謀格が実忠であった。良弁はその後、奈良に戻った。この間鑑真が753年来日し、755年東大寺に戒壇院を設置、756年5月2日聖武天皇崩御、24日、鑑真と良弁が大僧都になった。私の考えでは、鑑真には、後継者の一人に安如宝、良弁には、参謀格でお水取りを始めた実忠と、それぞれソグド系ペルシャ人がついていたことになる。良弁は756年、「東大寺山堺四至図」を作成、良弁の指示で760年には実忠が頭塔の建設に着手したと想像されている。この頭塔は、ストゥーパを指し、これに酷似すると注目されるのが、タジキスタン共和国ゴルノバダフシャン自治州に存在するワハン回廊のヴァン(ヴラン)仏教ストゥーパ遺跡である。ソグド人実忠は、ゴルノバダフシャン自治州のヴァン(ヴラン)仏教遺跡にゆかりの人で、この地に現代まで伝えられるゾロアスター教にも通じた人間ではないのか。そしてソグド人安如宝は、空海の師とも相談相手とも言われ、空海が渡唐し、真言宗を日本に伝える後押しをしたと想像されている。その空海を東大寺の別当に推薦したのがソグド人実忠であった。ヴァン(ヴラン)仏教ストゥーパ遺跡や頭塔は、ゾロアスター教のハラー山、仏教の須弥山ではなかったか?唐招提寺も東大寺二月堂のお水取りもペルシャ系ソグド人の活動を秘めていると考えられる。

以上のように、仏教寺院の建設に活躍した飛鳥時代の工人など、まず先行する東ペルシャ系の人々がいてソグド人やササン朝ペルシャの人々には日本が視野にあり、ササン朝ペルシャがアラブのイスラム教徒によって滅亡した(651年)後、最後のヤズドギルド三世の息子ペーローズや宰相がササン朝ペルシャ再興のため、長安に亡命(670年)し、その宰相の一族とみられるダーラーイ(達阿)が大和朝廷を訪れたり(659年)、遣隋使、遣唐使を通して、アジア史に密接につながっていた。651年にササン朝が滅び、751年にタラスの戦いで中央アジアのイスラム化が確定(唐が敗北)、則天武後の孫にあたる玄宗(李隆基)が心酔した楊貴妃一族の楊国忠との確執で反乱した安祿山の乱(安史の乱)が752年に始まる。安祿山はソグド人の父と突厥人の母を両親とする「雑胡」。753年に、鑑真和上が、揚州のソグド人コミュニティの支援を受けて、やっと来日した頃のことであった。

○ ソグド人の祖先; アファナシェヴォ文化の人々は、サラズム原始都市遺跡を遺し、ヨーロッパでは「古ヨーロッパ文明」を崩壊し、タリム盆地にトカラ文化を遺し、アンドロノヴォ文化の人々は、BMACを崩壊し、メソポタミア北部でミタンニ王国を形成し、インドでは「インダス文

明」を崩壊し、中国では華北に烏孫を遣し遊牧畜民国家を形成し、夏殷周形成に影響を与え、メオ族らの稲作文化に進入。日本には「アイヌの祖先」がアンドロノヴォとの推定も。山形県三崎山に青銅刀子をもたらしたのは、殷なのか、私がゴルノアルタイスクで見たカラスク型刀子か？

アジア史に占める東ペルシャ系ソグド人の役割は、月氏 Yuèzhī(Гэцци)という民族名称で中国の戦国時代の後期からうかがわれるが、アレクサンダーのソグディアナ侵攻にかかわるとみられる。さらにソグド人の祖先集団と考えられるアフアナシェヴォ文化やアンドロノヴォ文化の後継民族と想定されるインド・イラン系アリアと古代中国の歴史とのかかわり、夏・殷・周も、今から四千年前に遡って、寒冷化、乾燥化のグローバルな気候変動に伴い、「龍」信仰を持つ牧畜民であるコーカソイド系の遊牧民が流動性を高めて東へ、南へ移動し、「蛇、鳥、太陽」を表象する黄河流域の先住民と接触融合した結果であると考えられる（安田喜憲編『龍の文明史』/八坂書房、2006/2 刊）。そして西方ヨーロッパでも明らかになってきた。「古ヨーロッパ文明」を提唱したマリヤ・ギンブタスは、今から 7,000 年前から 5,000 年前にかけて、小麦、大麦、カラスノエンドウ、エンドウマメその他の野菜を栽培し、ウマを除く家畜を飼育して、黒曜石等の希少宝石や銅鉱石や金を入手する交易によって、複雑な社会構造を發展させていた古ヨーロッパ文明の人々が、今から 4,000 年前以降、半農半牧のインド=ヨーロッパ語族（アフアナシェヴォ系ヤムナー文化）の侵入によって分断、滅んだことを浮き彫りにしている。

すでに紀元前 3600 年前の内モンゴルの紅山文化で出土した女神像の眼に青い玉がはめ込まれていたり、タクラマカン砂漠で見つかった 4 千年前の女性のみイラが Y 染色体ハプログループ R1b-M269（アフアナシェヴォ系、トカラ文化）と判明したりしているほか、2500 年前と想定される山東半島の古代都市臨シ遺跡で出土した人骨がヨーロッパ、同じ臨シで出土した 2000 年前の人骨で中央アジアの DNA 遺伝子が確認されたり、また秦の始皇帝陵で兵馬俑建造にかかわったとみられる人骨がペルシャもしくはクルド人と同じ遺伝子を有すると指摘されている。中国では古く、「夏殷商」に先立つヤンシャオ文化はかねてコペトダグ山脈北麓のアナウの彩文土器を特徴とする新石器文化とのかかわりが語られることもあり、中国古代王朝と西戎北狄との深いつながりも指摘されてきた。羌族出身の太公望が開いた斉国のあった山東半島の臨シにコーカソイドがいたことは驚くにはあたらない。かつて中世城の調査や渤海港湾遺跡の発掘プロジェクトで訪問していた頃、ウラジオストクの考古学者、故 E. V. シャフクーノフ氏から、渤海時代（698-926）にウスリースク近くにソグド人集落があったと聞いた。中国で商胡と呼ばれたソグド人は、ユーラシア大陸の南ではシルクロードを、北では貂の道を形成していたことになる。いずれにせよ「古ヨーロッパ」あるいは日本の縄文時代から弥生時代にかけて、アフアナシェヴォ以前からそしてアンドロノヴォ系などソグド人形成の以前から、ソグド人同様移動性の高いコーカソイド系の農耕民や遊牧畜民の何派にもわたる波動にさらされていたのがユーラシアであった。シュメール文明、インダス文明、BMAC、三星堆遺跡、石峁遺跡など、BC2000 年を画期とし BC2300~1800 の間に、人類史上の大転換の秘密がタジキスタン共和国パミールに潜む。地球規模の寒冷化乾燥化が背景にある。後に大月氏以降、クシャン、ギダーラ、キオン、エフタル等はパミールからバダフシャン/ワハン回廊を中心とし 2~8 世紀にかけて中央アジアを支配したキルバンド王国の王朝名。カニシカ王は 4 代目のキルバンド王とする 500 年続いたキルバンド王国の王朝交替する考えが『アイハヌム 2004 加藤九祚一人雑誌』133 頁「中央アジアの謎の王国キルバンド」で紹介されている。ソグド人の「ミル（太陽）の王国」かも知れない。ソグド人とその後継者であるヤグノブ人、タジク人が、タジキスタン共和国パミール・ゴルノバダフシャンから見える世界の風景があるはずだ。

## ○ 日本神話に見られるジョルジュ・デュメジルの三機能体系は、アレクサンダー東征、ソグド、スキタイの東進の結果？！

天神から王権を授けられたという日本神話、スキタイ神話、ギリシャ神話に共通する特徴について触れる。日本ではかねて、日本の天皇制を表象する三種の神器については、朝鮮半島経由日本に伝わった王権神話として大林太良、吉田敦彦によって、ジョルジュ・デュメジルの比較神話学上の仮説として提起したインド・ヨーロッパ語族の三機能体系に通じ、「内陸アジアを経由し、朝鮮半島から来た」と指摘されてきた。

アルタイ山脈のスキタイ（パジリクの人々）は、ソグド人と同じ東イラン系の人々である。アルタイ山脈の南、天山山脈の北、シルダリアの北には「サカ（イ）」「サカ・ティグラハウダー（とんがり帽子のサカ）」と呼ばれたスキタイがアケメネス朝ペルシャやヘロドトスの時代にいたが、この「黄金人間（兵士）」が埋葬されたのは「紀元前3世紀」とされており、アレクサンダー中央アジア東進に反乱したスピタメネスらソグド人と一緒に戦ったスキタイの一人だったかもしれない。日本神話がギリシャやスキタイの神話と比較される大きな背景にソグド人がいると想像する。アレクサンダーが中央アジアを侵略した際（ガウガメラの戦いは BC331）に、スピタメネスのようにアレクサンダーに抵抗（BC329-328）したソグド人がいた。一方で、アルタイ山脈のスキタイ（パジリクの人々）はソグド人と共にアレクサンダーと戦う一方で、彼らの一部は多くのソグド人と共に東方に逃れたとみられ、一部は月氏として匈奴勃興に影響を与えた（のちの匈奴のリーダー冒頓単于が若いころ匈奴の人質として月氏が受け入れ）が、さらに東進し、タガール文化やオルドス青銅器文化と称されるのちの匈奴となる人々とソグド人、スキタイ人らは交流したと考えられる。中国戦国時代終末の趙を軍事大国にした武靈王（BC325-298）が騎馬民族の生活スタイル「胡服騎射」を導入する際、東進したソグド人らが影響を与えたと想像する。現在の中国甘粛省張掖市臨沢県板橋鎮を拠点にしていた月氏（アレクサンダー東征の際に移動したソグド人と想定；昭武九姓のソグド人の先祖は月氏という『新唐書』『隋書』の記載が理由）と、月氏から見て東南に位置する秦とも交流があった。もともと秦も、殷の時代の蜚廉、惡来、大駱、周の非子に遡り、馬の生産に従事する馬飼いを祖先とする一族である。スキタイやソグド人はすでに騎馬民族化しており、アレキサンダーの東征（BC328 スピタメネスの抵抗）を避けて南東の甘粛省に移動し、アルタイ山脈のスキタイ（パジリクの人々）と一緒にソグド人は月氏となり、甘粛省の秦、山西省の趙などにその機動性の高さで戦国七雄に影響を与え、趙の武靈王が「胡服騎射」を取り入れる（BC326 年即位、BC307 年胡服騎射取り入れ決める）ことになり、また内モンゴルのフフホト周辺のオルドス（綏遠）青銅器文化や匈奴、遼寧青銅器文化の人々（東胡）とも交流し、彼らが使用していたと想像できるアキナケス剣や王権神話などを伝えたと思える。東胡は扶余、高句麗の形成とかかわりがあったと考えられ、日本神話の形成は、アキナケス剣の影響で作られた細型銅剣も含め朝鮮半島の高句麗や百済を経由して北九州に伝達された結果と考えることができる。



スキタイ神話が日本神話形成に影響を与えた時代 || 月氏（ソグドリスキタイ）の文化がオルドス青銅器文化 || 匈奴、遼寧青銅器文化（東胡）に影響を与えた時代。

以上が、ジョルジュ・デュメジルの三機能体系に沿って、日本神話とスキタイ神話が、さらにギリシャ神話とが似ているとされる比較神話学の背景である。日本の弥生時代の青銅刀剣（弥生時代前期末；BC300 年頃の遼寧式細型銅剣に始まる）がスキタイのアキナケス剣と比較されるのも、アレクサンダー東征でソグド人らが東方に逃げたことと関わりがあると想像する。

## ○ 弥生時代の青銅器文化や日本神話の背景にアレクサンダーの東征とソグド人

以上を整理すると、タジクやタジキスタン共和国の原点というべき、中央アジアで最初のイスラム王朝である「サーマーン朝」(873年・999年)は、ソグド人の王 サーマーン・フダー(ソグド語で『領主サーマン』)が、8世紀前半にゾロアスター教からイスラムに改宗して、イスラム王朝の創始者となったことで誕生した。ゾロアスター教国家ササン朝が7世紀半ば(651年)、ヤズドギルド三世がイスラム軍に敗れて滅亡。息子のペーローズ三世が唐に亡命し、復活を期し、ペーローズの宰相と想像される達阿(ダーラーイ Даррай)が娘とともに来日している(657年)(『ペルシャ文化渡来考』)。アラブのイスラム軍の勃興は、中央アジア経由で日本とつながっていた。この中央アジアでササン朝を支えていたのがサーマーンフダーの家系で、ソグド人であった。中央アジアのソグド人は、アケメネス朝ペルシャの時代から知られ「ソグドイ」(『歴史』ヘロドトス)と呼ばれた。アルタイ山脈のスキタイ(パジリク文化の人々;大野遼は北方ユーラシア学会の事務局長としてパジリク王墓の発掘を総合プロデュースした)もソグド人同様東イラン系の人々であり、アレクサンダーの東征に対してスピタメネスと一緒に抵抗し、同時に多くのソグド人と共に東方に移動したと想像される。匈奴の勃興(オルドス青銅器文化)、東胡(遼寧青銅器文化)そしてのちの扶余、高句麗などとの交流を通して、日本の弥生時代前期末(紀元前3世紀)にアキナクス型細型銅剣を含む弥生時代の青銅器文化を形成する背景となり、大林太良氏や吉田敦彦氏らが、ギリシャやスキタイの王権神授と日本神話が類似しており「(日本神話は)内陸アジアを經由し、朝鮮半島から来た」と指摘した背景となる世界に、アレクサンダー東征で東方移動したソグド人やスキタイ人がいた。そしてのちに扶余、高句麗との接点が生まれる前史と考えられる。中央アジア史と日本古代史を考える際に、タジクの歴史文化そしてその前史となるソグド、スキタイの東進を視野に入れたシルクロード史を考えることは有益だと考える。

## ○ ゾロアスターはソグド語の祖を話し、ソグド川の上流、アムダリヤ(アナーヒター)の上流、タジキスタン東部(パミール;ゴルノバダフシャン)がゾロアスター教の故地;「アーリア人の故地」はホラーサーン以北(ソグディアナ)、「パミール」は「太陽神(ミフル)の足」?

ソグド人も信仰した中央アジアで形成された宗教の原点に、ゾロアスター教が存在する。教祖ゾロアスターの生誕地、生年についての説はいろいろあったが、伊藤義教氏は「シースタンのヘルマンド川下流ハームーン湖」「生年は紀元前630年頃、没年は553年、77歳」だった、と書いている(『ゾロアスター研究』岩波書店)。しかし生誕地、生年については、「バクトリア」「ソグディアナ」「ホルムズ」、生年は紀元前1200年、1000年などもある。最近下記に記すように、ゾロアスターの出身地はパミール高原とする情報がある。大野遼も、「春分の日に、ハラー山の天池から、二流の水が流れ出て、中央州で地上に出て地の七州を潤す」という、水神、アナーヒターへの信仰と、アナーヒターがアムダリヤの水神と考える習俗がアムダリヤ沿いにあるということから、パミール特に、加藤九祚先生が紹介する「ゾルクル湖」などにも面白みを感じてきた。今回日本語版装丁を担当したアナスターシャ・ザリフィさん(著者ハムロホン・ザリフィ氏の奥様)によると「アフガニスタンにはパミールを『パイミクル』、つまり東の山岳から太陽が昇る意味を有する『太陽の足=パイミフル』という表現が残っている。これがパミールの語源ではないか」という。ウィキペディアには「太陽の台座」という未確認情報も紹介されている。いずれもパミールは、「日出ざる山岳」の意味を持ち、ゾロアスター教のハラー山、仏教の須弥山を想起させ、ミトラス教、ユダヤ教はじめ世界宗教で中核に位置する太陽神の潜む山である。パミール周辺には、シュリナガル一帯の、紛争地として有名なカシミール、ヒンズークシ山脈の最高峰ティリチミールなど「ミール」の言葉を持つ地名が集中しているという。「ミール」が「ミフル」なら一大事だ。ミフル、ミスラは、バラモン教でリグヴェーダのミトラ、仏教の須弥山の兜率天にいる弥勒菩薩の淵源である。『太陽の足=パイミフル』であるパミールを視野に、インド・イラン共通時代に遡り、再考が必要だ。ソグド人は、日出国(ミフル太陽神の足もしくは台座パミール)から日出国(扶桑国日本)に達したコスモポリタンだ(最終項肥前国風土記)。

タジキスタンは、ヘルマンド川流域と共に、色濃いゾロアスター伝承を遺す地である。今、テルメズから北東400キロ、ピャンジ川の北、ゴルノバダフシャン（パミール）地区の標高1700メートルの丘で、BC2000年から15世紀までの時期の大規模なゾロアスター教所縁のカロン遺跡が注目されている。バダフシャンとパミールの門を意味するダルヴァザに位置。パミール人（ソグド人など東イラン系の民族で、パミール語の下位グループにシュグニー人もいる）が暮らし、ピャンジ川に面した「ケプロン峠」の中腹にあり、マルコポーロもいたとされる。マルコポーロはパミールを「Pamer」または「Pamier」と書いた。カロン遺跡は中央アジアの歴史・精神文化が凝縮されている大変貴重な調査地だが調査資金が不足しており、寄付を募集している。

ゾロアスター教は、先行アリアであるインド・アリアがインダス文明の人々を暴虐弑為するのを見て、ゾロアスターが善思善語善行を掲げて善の宗教を創始した気配が、リグヴェーダやアヴェスタを読むと濃厚で、最初ヒンズークシ山脈の南、ヘルマンド川からアラコシア一帯で活動を始めたが、一向に信者に恵まれず、バクトリアのヘラート周辺に移動し、ウィシュタースパ王の崇拜と、宰相とゾロアスターの娘の結婚で急速に信者が増加したようである。ゾロアスター研究で著名な伊藤義教氏はこれを「政略結婚」と評している。

メディアから権力を奪いアケメネス朝を作ったキュロス（二世）大王（ユダヤ人のバビロン捕囚からの解放で知られる）、カンピュセス二世を継いだ（篡奪とも評される）、ダレイオス一世（BC550-486）の父がウィシュタースパで、ゾロアスターを崇拜したウィシュタースパは単なる同名か、同一人物かと議論されている。ゾロアスターが活動した年代については「BC1200年前以前」（メアリー・ボイス）、「BC1000年頃」（ゲラルド・ニヨリ）「BC600年頃」（伊藤義教）の3つが知られているが、3つ目の「BC600年頃」だとすれば、ダレイオス一世の父ウィシュタースパは、ゾロアスターを受け入れたホラーサーンの領主ウィシュタースパと同一人物となると思われる。伊藤義教氏の年代観「ゾロアスター（BC630-553）」であれば、ダレイオスがアケメネス朝ペルシャに導入した「マズダ教」は父ウィシュタースパ経由の「ゾロアスター教」（ゲラルド・ニヨリ支持）となる。

特に触れておきたいことは、タジキスタンがアジアの人類史のミッシングリンクを埋める歴史文化的地勢にあるということである。大野遼はかねて、「ゾロアスター教の誕生したのは紀元前1000年頃が妥当だろうか。『アリア人の故地』は、アフガニスタンのヘラートを中心とするホラーサーン以北であったに違いない」（『アジアの眼第二章 20』—アジア源流「“幻の河オクサスから世界は始まった、という物語”）と考えてきたが、最近、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教そして仏教に大きな影響を及ぼしたと考えられるゾロアスター教の草創者ゾロアスターの聖典「アヴェスター」のガーサー言語の研究から、ゾロアスターはソグド語の祖にあたる言語を話し、またアヴェスタが示すアフラマズダが作った16国の歴史地理の考察から、タジキスタン東部（パミール；ゴルノバダフシャン）がゾロアスターの故地とみなされるようになってきている（『新ゾロアスター教史』青木健）。またゾロアスター教の後に仏教的須弥山の世界が、ゾロアスター教のハラ山が投影され、アナーヒターが観音菩薩の形でクシャン朝以降仏教世界の主役を演じるのを見ても、ヒンズークシ山脈、パミール高原、ヒマラヤ山脈が太陽と水を軸とする善の宗教を誕生させたという思いを強くする。ソグド川上流パミールにゾロアスター伝承が残る理由がある。ゾロアスターは、ヤグノブ人、パミール人、シュグニー人らの祖先になるか？この文章の最後に紹介するヴラン仏塔遺跡の上流130キロには、ハラ山の天池を想像させるゾルクル湖もある。

ちなみに、ゾロアスターの故地がパミール；ゴルノバダフシャン地域で、生年が伊藤義教氏の想定する「BC630年」だとすれば、一説による釈迦の没年（BC566-486）とダレイオス一世の没年（BC522-486）は同じであることから、釈迦の「八正道」は、直接もしくは間接に、ゾロアスターの善思善語善行のゾロアスター教の影響で唱導され、仏教は誕生したことになるとというのが大野遼の妄想である。ダレイオス一世がインドに勢力を及ぼした頃（BC516-486）のことである。仏教だけでなく、ユダヤ教の形成や当然キリスト教、イスラム教形成への影響もアケメネス朝のキュロス、ダリウスの活動が背景にあったことになる。

中央アジアやシルクロードの歴史文化を理解するには、タジクやタジキスタンの歴史に触れて「アジアの眼」を涵養することが欠かせないのである。ゾロアスターとゾロアスター教については加藤九祚先生の『シルクロードの古代都市』（岩波新書）第4章に詳しい。

## ○ ヤグノブ人の祖であるソグド人とソグド語はミッシングリンク

### ；失われたシルクロード史、中央アジア史理解の要

アケメネス朝ペルシャに先立って、ゾロアスター教を草創したゾロアスターが話したソグド語の祖語の秘密がパミール・ゴルノバダフシャンに潜む。そのパミールを源流として西流し、ソグド人が砂金や鉱石を採取し交易に従事するようになった母なる川がソグド川(ゼラフシャン、ザラフシャン川)。アケメネス朝ペルシャの公用語だったアラム語を基にソグド文字が誕生し、8世紀にアラブ軍の侵入で東ペルシャ系ソグド人が離散したのちも、アジア各地でソグド人集落を形成し、安史の乱以後中国では弾圧されたが、日本ではすでに触れた安如宝のように活動したソグド人も知られ、東ペルシャ系のソグド語は突厥第一可汗時代の公用語、チュルク系のウィグル文字形成の由来となり、天山ウィグル王国がチンギスハーンの「第五のハーン家」となったことでモンゴル文字誕生、満州文字誕生にも影響を与え続けたことに見られるとおり、ペルシャ系の文化の影響は、アジア全域で、国家民族宗教を超えてさまざまな分野に及び、音楽、詩、手工芸、などから文学、仏教など宗教イデオロギーにおよび、現在まで継承され、アジア理解の歴史文化的総括が人類史的課題となっている。

日本のソグド語、ソグド人研究をけん引する吉田豊・京都大学名誉教授と影山悦子名古屋大学准教授らは、中央アジア、西域、北魏・隋・唐代の金石文、遺跡出土の古文書断片、各地でコロニーを形成したソグド人の墓地出土のソグド語や壁画、日本の正倉院の文化遺産を手掛かりにソグド人とソグド語、ソグド商人の暮らしを再現する研究活動を続けている。『ソグド人の美術と言語』(吉田豊、影山悦子、曾布川寛)の再刊を希望。多様性への敬意、先住民族、少数民族への敬意が希薄になった今を考え、人類の未来に不安を感じる昨今、タジク(タジク人)、ヤグノブ人とソグド人、タジキスタン共和国のソグド州とパミール高原・ゴルノバダフシャン自治州のパミール諸語を話す少数民族を視野に魅力あふれる中央アジア史、シルクロード史再現の書の刊行が待たれる。

## ○ アルタイ山脈のスキタイ(パジリク)古墳の発掘が原点

大野遼が、「アジアの眼」や「多様性に敬意」を重視し、NPO法人を主宰しているのには、高校生の頃、川越駅前の書店で初めて手に取った『シベリアの歴史』(紀伊国屋書店)に感動し、メディアの記者だった頃、大阪にできた国立民族学博物館に教授として赴任してきた加藤九祚先生との出会いが契機となっている。5年間、毎年、加藤先生と考古学の加藤晋平先生と一緒にシベリア、アルタイ山脈を訪ね、「アルタイシベリア歴史文明展」を開催し、ゴルバチョフソ連大統領が来日し、ソ連が崩壊したその年の夏、北方ユーラシア学会とソ連科学アカデミーとの協定、日ソ交換公文に基づいて、アルタイ山脈のスキタイ(パジリク)王墓発掘に携わった。私は、多くの考古学者とアルタイ山脈を訪ねることとなったが、中でも京都大学で梅原末二の薫陶を受けパジリクを卒業論文にした田中琢・元奈良国立文化財研究所所長(埋蔵文化財センター長)と一緒に、アルタイ山脈のパジリク谷に大型ヘリで降り立ち、パジリク五号墳はじめ、巨大な積み石塚を踏査したことを今でも鮮明に覚えている。この時田中さんは五号墳の木槨を支えていた材木を年輪年代学上の研究のため大型ヘリに持ち込んだ。異常に臭かったと田中さんは言っていた。日ソ合同発掘で発掘することになった場所をウコック高原に決めたのは、モロージン氏と大野遼であった。二人がジープで移動、山脈を渉猟した結果だった。スキタイ(パジリク)王墓の発掘は、加藤先生がオクラドニコフ、デレビャンコ、モロージンその他多くのシベリアの考古学者との深い人間的つながりがあって実現したもので、大野遼にとってソグド・スキタイ(パジリク文化の人々)と関わる原点であった。加藤先生を知って50年以上、おつきあいが始まって40年以上を経て、最後に駐日タジキスタン共和国大使館でこの本『タジクの黄金遺宝』の著者で特命全権大使を務めていたザリフィ氏と加藤先生が面会した時の記念写真が加藤先生との活動の最後となった。NPO法人ユーラシアンクラブの理事長江藤セデカも同席していた。加藤先生は二か月後、ウズベキスタン共和国テルメズ市の仏教遺跡カラテパで発掘中に亡くなったからである。94歳だった。この時加藤先生は「大野さんの協力が無ければできないので頼みます」と大野に監修協力を依頼した。『タジクの黄金遺宝』日本語版の発刊は、加藤先生の遺言として携わったものである。加藤先生の背中を見て、シベリア、アルタイ山脈を経て、中央アジアのタジクの歴史文化遺産にたどり着いたとも言える。



## ○ コスモポリタン加藤九祚の「心はいつも旅する」

日本には、シルクロードや中央アジアに関心を持つ人が多い。ユーラシア、アジアの東端の海上に位置する日本に暮らす以上、日本人や日本文化の成り立ちを考え、その淵源として大陸を憧憬する気持ちは自然な感情である。加藤先生は、紛れもない日本人であるが、日本統治時代の、朝鮮・韓国慶尚北道出身の、韓国人、朝鮮人である。国家民族宗教を超えて、民族の共生を模索するという大野遼のユーラシアンクラブの原点は、加藤先生の感化によるのだなと今更ながら気づく日々である。私が北方ユーラシア学会を立ち上げた頃には出自をお聞きすることはなかったが、その人間力の大きさは尋常ではなかった。ユーラシアンクラブを立ち上げて当初から名誉会長をお願いし、中央アジアに通うようになってだいぶ時間を経たころ、いつも待ち合わせていた吉祥寺の駅前から焼き鳥屋に通う道すがら、加藤先生がポツリと言った。「大野さんには言っていなかったけれど、私は李九祚です」。私は「はい」と応え、愉快的気持ちになっていつも通り飲み屋に行き、いつも通り楽しく雑談した。詳しくは書かないが、加藤先生が親からの教えを受け、兄を頼って山口に行ってから暮らし、教師や多くの人から援助を受けて、職工をしながら上智大学への入学を果たしたものの、陸軍への応召、シベリア抑留、ロシア語との出会い、「青年の頃かなわなかったドイツ留学の代わりにシベリア留学した」という尋常ではない発想の転換。平凡社の出版物を売り歩く営業の仕事の傍ら、歴史文化に関連するロシア語の学術書の翻訳、ソ連、ロシア、中央アジアの多くの研究者との邂逅。垣根のない率直な人柄で、記憶もなくなるほど頻繁に飲む酒好きが、どうしてこれほどの出版物を遺してきたのかという謎。それは地道にこつこつと好きな読書を絶やさず、メモを取り続けてきた成果だった。「敦煌」など西域シルクロードの小説で知られる作家井上靖さんと中央アジア、シベリアを同行し、日本の伝説的考古学者江上波夫やシベリア考古学の父オクラドニコフを初め、その人間力が初対面の全ての人を魅了し、出来上がった城のような人脈が加藤九祚ワールドであった。これも多くを書かないが、加藤先生は大佛次郎賞、南方熊楠賞を受賞し、ロシア科学アカデミー名誉教授、ウズベキスタン共和国友好勲章授与、考古学的発掘をしていたカラテパ遺跡のあるウズベキスタン共和国テルメズ市の名誉市民であった。「心はいつも旅する」という私の友人井口隆太郎（ユーラシアンクラブ副会長）に残した加藤九祚の人生観は、私が見てきた、韓国、日本、シベリア、アルタイ山脈、中央アジアへの歴史文化の世界を訪ねる心の旅路を表象している。そして、朝鮮、韓国から日本へ、日本からシベリアへ、「抑留」を「シベリア留学」と受け止めたコスモポリタン加藤にとって、亡くなった今も、国家、民族、宗教を超えて「心は今でも旅をしている」と思う。私は今でも毎日加藤と語り合っている。『タジクの黄金遺宝』を手にする読者が、「心はいつも旅する」と発信したコスモポリタン加藤九祚の人間愛を受け止めてほしいと願う。それはソグド人の心でもあった、と思うからである。

大野遼が加藤九祚先生から受けた薫陶の心は、「多様性への敬意」「民族の共生」であり、特に少数民族への敬意である。この観点から言えば、アラブのイスラム軍の侵入で追われることになったソグド人はその後も交易に従事し、安如宝そして私の想定による実忠のように日本列島の土になった人もいたし、サーマーン・フダーのように新世界に順応した人もいた。しかしペンジケントやイスタラフシャンのソグド人のように離散し、人類史の表舞台から去った人も多かった。ソグディアナを含め広域で形成されたサーマーン朝の陰で、ゼラフシャン川（ザラフシャン川、ソグド川）の南、ザラフシャン山脈ヤグノブ溪谷に潜み、現在までソグド人の信仰ゾロアスター教の命脈をつなぐ、ソグド人の子孫ヤグノブ人がいることに人類史の悲しみを感じざるを得ない。日本でも、アジアのどこでも、少数民族、先住民族への敬意が、人類史の未来を考える時に欠かせない態度だと、改めて感じる。歴史文化を大切に、多様性に最大限の敬意を払うことがこれからの人類の未来を考える時に重要な態度だという意味で、ヤグノブ人への敬意ある態度を心を込めて示したい。シルクロードの歴史文化や中央アジア史と日本古代史を考える際に、タジク、ソグドの歴史文化を視野に入れることは有益である。

## ○ 中央アジアの「歴史の窓」「人類史の窓」「ユーラシアの歴史文化の窓」を開けたザリフィと加藤

今回日本語版が発刊された『タジクの黄金遺宝』の著者ハムロホン・ザリフィ氏は、中央アジア史やシルクロード史におけるタジク人やタジキスタンの役割を、豪華な文化遺産を総カラーで紹介することによって、日本人

に初めて、中央アジアとシルクロード理解の「歴史の窓」を開けてくれた。高松塚古墳の壁画に描かれた婦人像の衣装がソグド人やタジク人の伝統的民族衣装とそっくりであると日本国奈良県で現認したことは、駐日大使としてのザリフィさんの最大の成果の一つだと受け止められる。また私が半世紀にわたり背中を拝してきた加藤九祚先生は、シベリア抑留を「シベリア留学」ととらえて、シベリア、西域、中央アジアの「人類史の窓」「ユーラシアの歴史文化の窓」を開け、中央アジア史、シルクロード史におけるソグド人、その後裔民族であるタジク人の役割を初めて強調した偉大な学者である。ハムロホン・ザリフィと加藤九祚という二人の開拓者の邂逅によってこの本はできた。ロシア語テキストからの日本語訳は吉田臣吾、吉尾博が携わり、友人であり仲間である伊藤洋治、山田美奈の二人の協力で校正、再翻訳の作業を完了した。校正上の不備の責任はすべて大野遼にある。日本語版の『タジクの黄金遺宝』が多くの日本人の手に届くことを強く願っている。

## ○ 「多様性に敬意を」「民族共生」を模索、ソグド人やタジク人を視野に新しいアジア史を！

中央アジア史、アジア史の見直しが必要な時代となる中、中央アジア・シルクロードの興味の中に「タジク人」「ソグド人」を視野に入れることで、多様性に敬意を払い、民族共生を模索する、国家民族宗教を超えた新しいアジア史が見えてくる。シルクロード、中央アジアに興味を持つ多くの人が目にする文化遺産のどれほど多くが、タジクとタジキスタンの歴史とかかわりがあるかを、この本を通して知ることができる。

## 【「タジクの黄金遺宝」日本語版発刊で『黄金』について一言】

## ○ 金は王権、極楽浄土を表象、タジクの文化遺産を黄金色で表象するのは正しい。

大野遼が、1980年代後半、加藤九祚先生とアルタイ山脈に通っていた頃の思い出の一つだが、通称「ジプシーの丘」と呼ばれる発掘現場を訪れたことがある。そこはアルタイ山脈の西端にあり、北東からハカス自治共和国、アルタイ自治共和国が続き、その南西にバルナウルを首都とするアルタイ地方が位置し、シベリア平原とアルタイ山脈の境界にある。眼下に草原が広がる壮大な景観が広がり、何段かの丘が斜面に北東から南西に伸びていた。この丘に遺跡が広がっているのだが、一つ下の丘のベルトの一角にジプシーの一家がテントを設営し、両親と子供を抱えた女性が、羊の世話を請け負って滞在していた。ビースクにジプシーの集落があると聞いた。その日、丘から遠目に灌木が茂る山の上の斜面から女性の歌声が聞こえたのに気づき、女性の向かった方角に行くとテントがあった。加藤先生と一緒に訪ねるとお茶を出され、父親が放った一言が「(発掘で) 黄金は出たか？」というものだった。私たちは、アルタイ山脈の名前が「金山」であることを再確認した。私たちが数回滞在した旧石器研究の拠点の一つとなっているデニソワ洞窟の下を流れるカトウニ川には点々と砂金を採取した穴が開いており、ヘロドトスの「歴史」には、スキタイが手に入れる金の一つ目のアリマスポイ人が守る金だと記されたのがアルタイ山脈だった。かつてアムダリヤ(川)と合流したソグド川(ザラフシャン川)は、「黄金の水しぶき」と呼ばれ、ソグド川の上流で砂金が取れたことに由来するとされる。私は、この金が、ソグド川—アムダリヤ(川)—カスピ海南端經由メソポタミアまで運搬されたと想像する。アルタイ山脈とパミール高原の間に位置する天山山脈、独立後のキルギスの経済を支えた金鉱山がイシククル湖の南にあった天山山脈も黄金山脈だったのだろう。

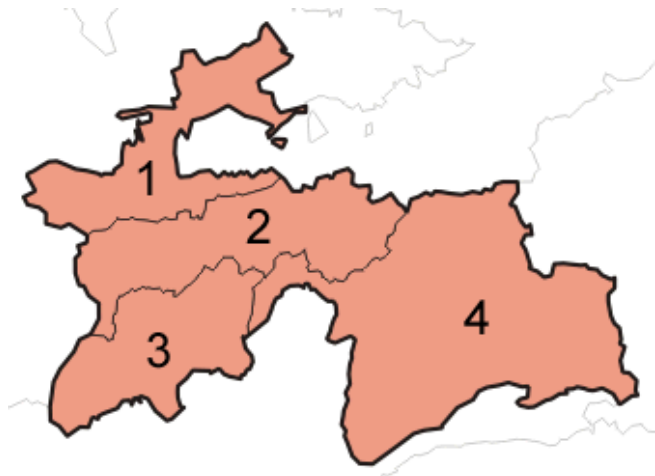
エジプト、シュメールやインダスなど人類が文明を誕生させ王権が支配するようになると、王がその表象として求めた鉱石の一つが黄金。そしてラピスラズリであった。黄金は、アルタイ山脈、天山山脈、パミール高原にあり、ラピスラズリは、世界で一か所だけでしか採掘されておらず、アフガニスタンのヒンズークシ山脈の北東バダフシャンのサリサング鉱山で採取された。アジア大陸の中央に位置し、北からアルタイ山脈、天山山脈、パミール高原、ヒンズークシ山脈、東西に延びる山脈は、古代文明を荘厳する金、ラピスラズリの産地だった。まばゆい黄金色で飾り立て、群青色のラピスラズリで際立てることが王権を表象し、価値あることと考えられた。パジリク古墳を含めスキタイの王墓からは多くの黄金製品が出土することで知られ、『タジクの黄金遺宝』で紹介

介されている文化遺産にも黄金製品が重要な役割を持っている。その黄金は、農耕文明の隣で牧畜に従事していた人々の長男、次男の仕事になっていた。彼らは、川から砂金を採取していた。後に銅鉱石が使用され、錫を加えて青銅器を作るようになり、人類史上では「青銅器時代」「青銅器文化」と呼ばれているが、当時の色を想定すれば「黄金時代」「黄金文化」と呼ぶのがふさわしい。私は青銅器の復元に取り組んだ研究者から小型の銅鐸セットをいただいたことがあるが、それは黄金色に輝いていた。青銅器は、金に替わる、「黄金」の威信財として製作された。天神から王権を授けられたことを示す権威付けであるから「黄金色」を求めたのである。金色は、時間と共に変わらない、神秘的で、天神に近い王の不老不死、王権の絶対性を表象した。エジプトのピラミッドのミイラの黄金の仮面、世界の王がなくなった際に遺体と一緒に埋葬した黄金の品々、そして「黄金色」の青銅器の数々。東アジアで、砂金で栄えた女真族は国名を「金」とした。クシャン朝で形成された大乘仏教の經典「無量寿経」「法華経」では、阿弥陀のいる極楽浄土を莊嚴する「七宝の木」の筆頭が金であり、二番目がラピスラズリ（瑠璃；僧空海の守護石）で薬師如来の浄瑠璃世界を莊嚴する。後に仏教で、仏像が黄金色を呈しているのも、涅槃、極楽浄土への願いを色で表している。ハムロホン・ザリフィ氏が『タジクの黄金遺宝』日本語版発刊を加藤九祚先生に協力を依頼した際、日本語版の書籍の表紙の色は「黄金色」がふさわしい、と提案したのは大野遼である。タジク、タジキスタンの歴史文化が中央アジアの基層文化に大きな影響を与えていること、祖先となるソグド人が、元々ソグド川（ザラフシャン：黄金の水しぶき）で砂金を採取していたこと、シルクロードを経て日本に伝わった仏教文化では、黄金色が最高の価値とされていたことなどを考えたからである。ついでに言えば、チンギスハンの子どもたちが黄金の氏族、チンギスハン死後の宮殿が黄金宮殿と呼ばれ、人々を金塊探しの盲動に走らせ、人類史の現代でも、金は最高の価値とされ、貨幣の「金本位制」が論議され、人類の飽くなき黄金への憧憬は、人類が川沿いで文明を立ち上げ、男性結社が優勢な国家の歴史を刻むようになっても変わらず、「金は金」と世界の金融資本が群がり、人類の未来に不安の種にもなっている。全人類の価値が金の総量とみなす考えは根深い。やはり「金は金」。中央アジアのタジク（ソグド）の文化遺産を「黄金遺宝」とするのは全く正しいと思う。

【タジキスタン共和国とサーマーン朝、ソグド州】ウィキペディアから

タジキスタン共和国と行政区

(ウィキペディアから)



青はサーマーン朝  
赤はタジキスタン共和国

州	タジク語	ISO 3166-2	州都	面積 (km <sup>2</sup> )	人口 (2016) <sup>[1]</sup>	番号
ソグド州	Суғд	TJ-SU	ホジェンド	25,400	2,511,000	1
共和国直轄地	Ноҳияҳои тобеи	TJ-RR	×	28,600	1,972,300	2

	Ҷумҳурий					
ハトロン州	Хатлон	TJ-KT	クルガン・テッパ	24,800	3,047,800	3
ゴルノ・バダフシャン自治州	Кӯҳистони Бадахшон	TJ-BG	ホログ	64,200	217,400	4
ドゥシャンベ	Душанбе	TJ-DU	ドゥシャンベ	100	802,700	×
合計	Тоҷикистон	×	ドゥシャンベ	143,100	8,551,200	×

タジキスタンは3つの州と1つの自治州から成る。更に首都のドゥシャンベは州と同じ行政的位置づけで直轄市となっている。ドゥシャンベは2の共和国直轄地の西部に内包される。州はさらに郡に分けられ、タジキスタンには全部で59の郡が存在する。

### 中央アジア、シルクロードの基層文化の一つが潜むソグド州（ウィキペディアから）

ソグド州はタジキスタンを成す4つの州の一つで、同国の北西部に位置する。州都は、ホジェンド(以前のレニナバード)。面積は26,100平方キロメートル。人口は1,870,000人(2000年の調査)。

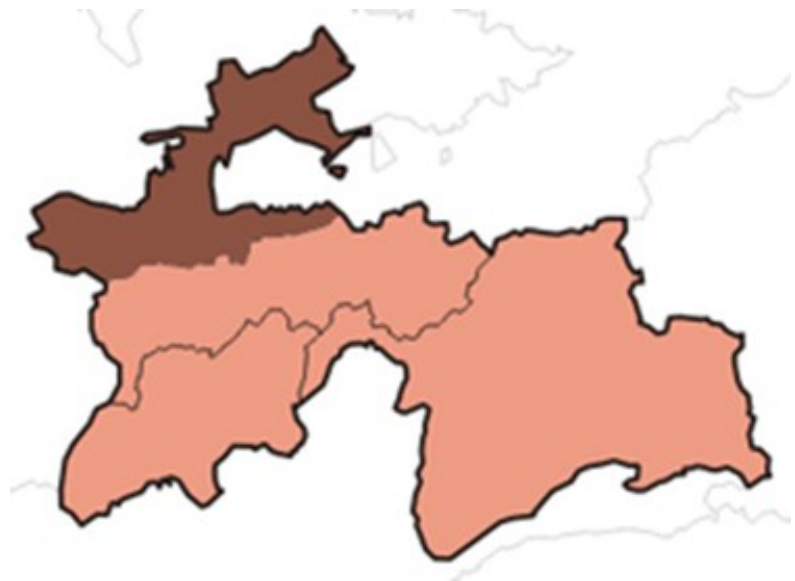
この地域は、ウズベキスタンのジザク州、ナマンガン州、サマルカンド州、フェルガナ州、キルギスタンのオシシュ州と国境が入り組んでいる。シルダリヤ川が流れ込む。

・ ゼラフシャン川（ソグド川）は北のトルキスタン山地と南のゼラフシャン山地の間を流れる。

ソグド州は、14の地区に区分される。

#### 北部

1. アシュト地区
2. ガフロフ地区
3. ガンチ地区
4. ザファロバード地区
5. イスタラフシャン地区
6. イスファラ地区
7. カニバダム地区
8. マストチョフ地区
9. スピタメン地区
10. ジャボール・ラスロフ地区
11. シャフリスタン地区



#### 南部

1. アイニ地区
2. クーヒスターニ・マストチョフ地区
3. ペンジケント地区

#### 主要都市

州都ホジェンドは、1991年まではレニナバード (Leninabad)、2000年まではレニノボード (Leninobod)、2004年まではソグド (Sogd) として知られていた。その他の主要都市は、

- ・ チカロフスク Chkalovsk ・ ガフロフ Gafurov ・ イスファラ Isfara
- ・ イスタラフシャン Istravshan (Urateppa、ウラ・チューベ)
- ・ カニバダム Konibodom (Kanibadam) ・ ペンジケント (ペンジケント) Panjakent
- ・ ヴォルフ Vorukh

**民族** ヤグノビ溪谷に住むヤグノビ人は、ソグド人の末裔である。

**言語** ヤグノビ語は、山間部でソグド語が細々と保たれてきた言語である。かつて使われていたソグド文字は、ウイグル文字やモンゴル文字に発展したが、現代までにソグド文字は使われなくなっている。

**宗教** かつてのソグド人の宗教は、ゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、仏教であったが、現代ではイスラム教スンニ派が多いものの、ゾロアスター教の風習も残っている。

### 【この文章で触れた中央アジア、タジキスタンの歴史時代】

大野遼が加藤九祚先生の後を歩き、触発された中央アジアの歴史、タジク、タジキスタンの歴史文化遺産については、①アフアナシェヴォからアンドロノヴォ、②インド・アーリアからイラン・アーリアへの移行、③ゾロアスター教の草創、アケメネス朝ペルシャからアレクサンダー（ヘレニズム）、④月氏の形成から昭武九姓、大月氏、クシヤン朝からササン朝ペルシャ、⑤ササン朝ペルシャからアラブ・イスラム、⑥タラスの戦いを経て、サーマーン朝からチュルク諸王国のイスラム化、⑦天山ウイグル王国、西遼からモンゴル帝国・チャガタイ・ウルス、ジョチ・ウルス、⑧チムール帝国などモンゴル帝国継承政権（チンギス統原理）の興亡、⑨トルクメン、ウズベク、カザフの形成、⑩ロシア帝国、旧ソ連の時代からタジキスタン共和国の時代へ、と歴史文化の興亡を反映した文化遺産が含まれる。中央アジアの歴史の基層文化が実感できるのが、タジク、タジキスタンの歴史である。『タジクの黄金遺宝』日本語版発刊に際して、日本人の理解の一助のためにと、この文書で記したのは、①～⑤まで、いわばサーマーン朝の形成前史に属する時期で、特に日本とのかかわりにおいて日ごろ気になっていたことの一部であって、大野遼の妄想を含む。大いに異論のあるところと思われるが寛恕を願う。

### 【タジキスタンの歴史文化をとどめるタジキスタンの古代都市情報を北から南に一部紹介する】

#### ○ ホジェンド

タジキスタン共和国ソグド州の首都。日本人には「天馬」で知られたフェルガナ峡谷の入り口に位置し、市内をシルダリヤ（川）が流れ、アケメネス朝ペルシャのキロポリ城塞（BC6世紀）、アレクサンダーのアレクサンドリア・エスハテ（最果てのアレクサンドリア/BC329年）が建設され、漢の武帝に派遣された張騫が大月氏へ向かう道程にもあたると想定される地。その後もモンゴル軍との戦いの場やチムール朝の支配など、シルクロード、アジアの東西の接点に位置する。ウズベキスタンのフェルガナを訪ねる時、タジキスタンのホジェンドを通過する。

#### ○ イスタラフシャン ソグド人のムグ山城、玄奘三蔵が訪れたブンジカット、ロムルスとレムスの壁画

ザラフシャン川（ソグド川）の北がトルキスタン山脈、南がザラフシャン山脈。ザラフシャン溪谷の下流がペンジケント・サラズム、サマルカンド、ブハラ。このザラフシャン川からトルキスタン山脈を越えて、ホジェンドに向かう途中に位置するのがイスタラフシャン。アケメネス朝ペルシャのキュロス大王が築き、アレクサンダーが破壊したムグ山城（テパ、テペ）は、クシヤン朝もアラブも要塞を築いた交通の要衝であるイスタラフシャンにある。5-8世紀のソグド人の要塞集落跡がブンジカット。王宮では、ローマ建国神話のロムルスとレムス（オオカミの乳を飲む双子の赤ちゃん）の壁画が発見されている。トルキスタン山脈を通過する隊商のため、ナイフや蹄鉄など武具、馬具を冶金する職人街の伝統が残る。ソグド人がローマの建国神話を暮らしの中で壁画に描くほど通じていたのに驚くが、そうするとオオカミに育てられた子どもという突厥の始祖伝説が気になる。安祿山、史思明に見られるようにソグド人と突厥は交流が深く、突厥語はソグド文字を使用していたからだ。

#### ○ サラズム原始都市遺跡とペンジケント・ソグド古都遺跡そしてヤグノブ人

世界遺産に登録されているのがサラズム原始都市遺跡である。ソグド州ペンジケント地区にあり、トルキスタン山脈と南側のザラフシャン山脈に挟まれたザラフシャン川沿い（溪谷）にあり、紀元前3000年に遡る冶金鍛

治の遺跡だが、アフアナシェヴォ文化からアンドロノヴォ系文化への移行が考えられる遺跡である。のちにソグド人の祖先が金や銅鉱石を採取、加工していたとみられる。ペルシャ詩の大成者ルーダーキーを記念した博物館がある。ルーダーキーについては『中央アジア歴史群像』（加藤九祚、岩波新書）で紹介されている。

上記した通り、車で 15 分のところに、ソグドの主要都市の一つマイムルグと考えられるペンジケント遺跡が存在する。ソグド人の暮らしを描いた彩色の壁画や住居址が出土。カロシュティ文字（ダリウス一世がインド遠征の際アラム文字を基に作った表記文字。初期仏典に使用された）で書かれた契約書の本簡などが見ついている。722 年アラブのイスラム軍に包囲されて崩壊した。ペンジケントの発掘に一生をささげたボリス・マルシャークの墓が遺跡入り口にある。今は、タジキスタンとウズベキスタンの国境で隔たれているが、西方 50 キロにはサマルカンド（ソグドの町・康国）、さらに西方にブハラ（後にサーマーン朝の都が置かれたソグド人の町安国・安如宝の故郷）が位置している。

アラブ軍の侵入で高地に逃れたソグド人の子孫がヤグノブ人である。ヤグノブ人の人口はわずか 2 万 5 千人。ペンジケントから南東 151 キロのヤグノブ溪谷は、ドゥシャンベ北方車で 40 分。山中の隔絶した地で、苦しい生活を強いられているという。人類遺伝子学の調査で、アフアナシェヴォタイプ R 1 b とアンドロノヴォタイプ R 1 a が見られ、サラズム原始都市遺跡で見られた歴史文化の変遷の結果形成されたソグド人の形成を垣間見せる。人類史に大きな足跡を残した歴史文化を有するヤグノブ人に敬意を払いたい。

### ○ タフティ・サンギンのオクス神殿遺跡；ヘレニズムの背景を示す

『タジクの黄金遺宝』では、さまざまな黄金遺宝が紹介されているが、オクサス（アムダリヤ）の右岸にある、タフティ・サンギンのオクス神殿遺跡は注目される。加藤九祚先生の晩年の著作『シルクロードの古代都市』岩波新書（第 3 章「アムダリヤに響くフルートの音」にタフティ・サンギンのオクス神殿」として詳しく紹介されている。大野遼の関心は、ヘレニズムの源流にある。通常タフティ・サンギン遺跡と称されるオクス神殿遺跡は、イオニア式柱礎のあるギリシャ建築の影響と火と水の信仰を示すゾロアスター教が共存することで、調査者のリトヴィンスキーによって、セレウコス一世とアンチオコス一世の時代（BC 三世紀初め）に建てられたとみられている。グレコバクトリア期以後、グレコバクトリアを滅ぼした月氏、クシャン朝の時代にもオクス神殿は使用されており、ヘレニズムの文化は継承された。セレウコス一世の妻は、アレクサンダーを悩ませたソグド人スピタメネスの娘、アパマで、アパマから生まれたのがアンティオコス一世であった。アンティオコス一世は、セレウコス一世からユーフラテス川の東の共同統治者に指名され、父の死後セレウコス朝を統治したが、広大な領土の各地で都市建設に努めていた。タフティ・サンギンのオクス神殿も、ギリシャとソグドの血を引くアンティオコス一世による旧アケメネス朝ペルシャの領土で誕生した「ヘレニズムの子＝アンティオコス一世」の作品だった。歴史文化が女性によって継承される一つの事例である。

### ○ アジナテパ遺跡

ドゥシャンベは、山がち（国土の 93% が山地）で起伏に富み、緑が多く、日本にいるような雰囲気があって、日本人にはほっとする空間である。案内されたタジキスタン国立古代史博物館に展示されていた長さ 13 メートル、重さ 6 トンの釈迦涅槃像は、2008 年、アジナテパ遺跡で発見され、タジキスタンが大乗仏教の形成地の一角を占めていることを示す。ウズベキスタン共和国とタジキスタン共和国の国境を挟んで西側にスルハンダリヤ川、東側にカフィルニガン川、ワフシュ川が、北から南に 3 本流れ、いずれもアムダリヤに注いでいる。加藤九祚先生が発掘した仏教僧院カラテパ遺跡は、アムダリヤに流れこむスルハンダリヤ河口の西 30 キロに位置し、加藤先生が亡くなる直前に山歩きした上流デナウから、ほぼ東方に位置するワフシュ川の左岸（南方）に位置するのがアジナテパ遺跡である。ユネスコの世界遺産仮登録リストに入っている。

## ○ ワハン回廊のヴァン（ヴラン）仏教遺跡

ゴルノバダフシャン州のパンジ川（アマダリヤの上流；ワハン川とパミール川の合流点ランガル村まで）の上流パンジ川沿いのワハン回廊にあるヴラン村。さらに上流パミール川に位置し、アジアの四大河の水源と考えられたゾルクル湖まで 130 キロである。

「ヴァン仏塔遺跡」は、2019 年 4 月、私がドゥシャンベを訪問した際にも博物館の壁に写真として掲示しており、東大寺大仏殿の正面に位置する頭塔によく似ている。頭塔の製作者が東大寺別当だった良弁の知恵袋ナンバー2 の権別当実忠だと聞いていた。実忠は、良弁から空海まで東大寺の経営を支えていたキーパーソンで、大野遼がメディアの記者として奈良支局にいたころから、二月堂のお水取りに家族ともども訪れながら注目していた。実忠はかねて、伊藤義教氏が、「インドの事情に明るいペルシャ人」と指摘していることから、ずっと気になっていた。伊藤氏は、従来インド人と言われてきた実忠について、「実忠は異邦人」というペルシャ人ではないかと初めて指摘した人で、二月堂の達陀の行法、福井県若狭の遠敷明神から春二月に二流の地下水脈が二月堂の前の若狭井で湧き出るのは、ゾロアスター教由来であることを説明した上での指摘だった。その実忠が制作したという頭塔がずっと気になっていた。ある時岡山県の丸谷憲二さんが熊山遺跡と比較できる遺跡として「ヴァン仏塔遺跡」を挙げておられるのを目にして、興味を持つようになった。2019 年 4 月タジキスタンを訪ね、古代史博物館を見学した際、この遺跡の写真が掲示してあるのを目にして、ぜひ現地を訪ねたいと思ったが、今日までかなえられていない。しかしグーグルアースで検索したところ、ワハン回廊のランガルから西 26 キロのヴラン村にあることが確認できた。ヴァンとあるのは「ヴラン」のことだと思われる。すでに現地を訪れた日本人もおられ、ピラミッド状の四段の石積みの基壇と近くに洞窟があり、仏像もあると報告がある。ワハン回廊は、アマダリヤ沿い上流になる東に向かいワハン川と名前が変わり、そのまま進むと北に向かい新疆ウイグル自治区のカシュガル（430 キロ）、南に向かうと仏教文化の拠点ともなったシュリナガルに届く（408 キロ）地勢にあっ



て、馬であれば数日で達することのできるシルクロードの回廊となっていた。  
**ヴラン仏塔遺跡（左）と実忠の頭塔（東大寺）（右）**



**ヴラン(ヴァン) 仏塔遺跡**  
 地図の説明を入力します。

**ヴラン仏塔遺跡**  
 左（南）がピャンジ川（川向うがアフガニスタン）  
 右（北）がパミール・ゴルノバダフシャン  
 下（東）がランガル村経由パミール川、ゾルクル湖  
 上（西）がワフシュ川と合流しアマダリヤへ、テルメズのカラテバ遺跡

この回廊からは、カシュガル経由陸のシルクロードも、シュリナガル経由海のシルクロードも視野に入る。伊藤義教氏が「インドの事情に通じたイラン人（ペルシャ人）」と見る実忠が、頭塔によく似た仏塔のあるワハン回廊のソグド人ではなかったか、とヒンズークシーパミールーインドあるいはタリム盆地経由の歴史文化的背景に実忠を置きたい夢からられる。ヴランの仏塔遺跡からワハン回廊沿いに 130 キロ上流パミール川に、ゾロアスター教のハラー山の天池が想像されるゾルクル湖もあるからだ。







### 【ラピスラズリの道からシルクロードとソグド錦＝ザンダニージー錦】

シルクロードは、漢の武帝による対匈奴の遠交近攻策として張騫が西域に派遣された紀元前二世紀以降の東西交通路を指している。中国産の絹を表象してシルクロードと呼ばれるが、アルタイ（金山）に代表される「黄金路」や張騫の情報による烏孫の「西極」、大宛（フェルガナ）の「汗血馬」などの「天馬」を求めたことから馬の道でもあった。東西交通路では「テンの道」もある。フェルガナ盆地の西の玄関はタジキスタン共和国のホジェンドで、上記した通り、キュロス、アレクサンダーも要塞を設置した東西の要の地。フェルガナはソグド人の土地だった。ソグド人は、フェルガナ（大宛）からトルキスタン山脈を越えてゼラフシャン川（ソグド川）沿いにパルチアの首都ニサのあったコペトタグ山脈を経てカスピ海経由バビロニアに移動し、交易に従事した。

シルクロードには「ラピスラズリの道」という交易路の前史もあった。アフガニスタンのバダフシャン・サリサングが産地で、シュメール初期王朝のウル王の宝物やエジプトのツタンカーメンの黄金のマスク、バビロニアやエジプトではラピスラズリを粉末にして壁画に使用された。アフガニスタン北部のアレクサンダーが建設したアレクサンドリアと考えられているアイハヌム遺跡の近くで、インダス文明のハラッパ遺跡ゆかりと考えられているショルトガイ遺跡が発見され、さらに南西の方角ではシュメール文明ゆかりのフロル遺跡が注目される。いずれも出土遺物からの推定で、紀元前 2000 年前後で、トルクメニスタンの BMAC（バクトリア・マルギアナ考古学複合）遺跡と重なる年代で、ラピスラズリの採掘加工にかかわるとみなされている。私は、アンドロノヴォ文化の人（インド・イランアリア）のうち、インドアリアの南下に伴い崩壊したシュメール・インダス鉱石ネットワークを構成していた遺跡だと考えている。

インドアリアが、インダス文明を崩壊させた後、さらにガンジス川に移動。バラモンを中心とするカースト制度を形成する。そのあとイランアリアのソグド人が進出し、アケメネス朝ペルシャのアラム文字を基にソグド文字を使用するようになり、ソグディアナの支配者がアレクサンダー、セレウコス朝バクトリア、パルティア、大月氏、クシャン朝、エフタル、ササン朝、西突厥、と変わっても、ソグド商人は活動をつづけた。

「ソグド人はシルク貿易の仲買業に甘んじることなく、6 世紀末には独自の絹紡績業を作り上げた。ソグド職人は中国、ササン朝ペルシアとビザンチンのシルクの図柄と西方の緯錦紡績技術を広範に取り入れ、後発の優勢を発揮し、内外にその名が知られるザンダニージー錦 (Zandaniji Silk) を生み出した」（「シルクロードのソグド錦」林梅村）。ソグド錦（ザンダニージー錦）は、5-6 世紀のウズベキスタン共和国のソグド遺跡出土のバラリュクテパ壁画、麴氏高昌国時代（460-640）のトルファン出土錦断片、6-7 世紀のキジル千仏壁画、8 世紀のタジキスタン共和国ペンジケントのムグ山城出土品など、シルクロードの交易商人が自ら作り上げたオリジナルのシルク製品で中国産やペルシア産のシルクと競っていた。8 世紀にサーマーン・フダーがゾロアスター教からイスラム教に改宗し、中央アジアがイスラム化された後も、ブハラのソグド錦（ザンダニージー錦）の職人は活動を続け、ロシア北カフカスの古代アラン人の墓地から、シルク断片 200 点以上が発見され、その 60%がソグド錦、20%がビザンチン錦だった。13 世紀に、モンゴルが中央アジア遠征の際、ソグド錦の職人が、中国河北省陽原県に連れ去られて元のソグド錦を織ることになった。中央アジアのソグディアナからはソグド人が離散することになったが、ソグド錦だけでなく、ソグドの衣装、ソグド語など多くの文化は現代に継承されている。

629 年に玄奘三蔵は国禁を犯して河西回廊經由高昌王の麴文泰の援助で中央アジア經由インド入りし、645 年帰国している。642 年、ニハーバンドの戦いにササン朝ペルシアが敗北、651 年、ヤズドギルド 3 世が死去しササン朝ペルシアは滅亡した。玄奘三蔵のインド行は、ソグド人の交易商人が輝いた最後の歴史の狭間。玄奘が無事帰国できたので後に、遣唐使の一員で渡唐した僧道昭が玄奘の部屋で暮らしながら指導を受けて、日本の法相宗（薬師寺、興福寺）の開祖となった。戦時中発見された玄奘三蔵の遺骨は、さいたま市岩槻の慈恩寺と奈良・薬師寺に分骨されている。ソグド錦は、9~10 世紀の敦煌などでタラス河畔の戦いで中央アジアでイスラム化が確定する歴史を潜り抜けた。ザリフィ氏が「文化は歴史の主人。政治家は客人」と言われるように、現在の国家民族の豊かさ、多様性は、コスモポリタンソグド人の恩恵に浴していると言える。

## 【ソグド=胡と昭武九姓】について

タジキスタン共和国西端に位置するペンジケント遺跡は、かつてソグドの都市米国（マイムルグ）と呼ばれ、たくさんの壁画が発見されその中には宴会風景を描いたものがあり、盃を持つソグド人が胡坐（あぐら）を書いている。暢気に構えている、という意味になる胡坐の胡がソグド人。胡にはほかに、胡姫もあり、唐代中国の舞姫。李白の詩に、馬に乗って胡姫のいる酒場に行く若者を謳った「少年行」があり、李白自身も酒浸りで、胡酒（ワイン）、胡弓の演奏で胡曲を聴きながら胡姫の舞う胡旋舞を眺めていた。李白は、キルギスの西突厥の都市碎葉（スイアープ）生まれというのが郭沫若説。李白の祖父が隋末の騒乱を逃れた先が碎葉城。インドへの旅の途中に玄奘三蔵が立ち寄っており、李白の祖父とすれ違ったかもしれない。李白と同様にこの碎葉城起源とされているのが曲項四弦琵琶。隋唐の音楽の系譜に触れている「事物紀原」（北宋）には「（琵琶は）碎葉国所献」とされ、この琵琶は曲項四弦琵琶で、当時も使用されていた直項五弦琵琶は、既に由来がわからず「北国起源」かもしれないと記す。私は、この曲項四弦琵琶も胡楽器と考えている。【アジアの眼】6号第一章—アジアの音楽史「江戸歌舞伎はチンギスハーンがいなかったら誕生しなかった！？という物語」【曲項四弦琵琶はソグド人が生み出した】に詳しく紹介している。ハイラトン琵琶にも楽琵琶にも三日月の共鳴孔がある。日本では琵琶法師の琵琶から薩摩琵琶まで、音楽をとおしてソグド人=胡とつながっている。日本にはほかに、胡瓜（キュウリ）、胡桃（くるみ）、胡豆（ニンニク）、胡豆（そら豆）、餃子や麺類など小麦粉を使った料理は胡食、そしてザリフィさんが触れているように故菅谷文則元樞原考古学研究所長が指摘した胡服は神主の衣服に残されている。ソグド人=タジクの祖先と日本人は深いつながりがある。ちなみに、推定に満ちた李白の出自について、大野遼は妄想ついでに李白はソグド人だったかもしれないと夢想する。さらについでに、加藤九祚は李白の子孫かも知れない。

ソグド人は、騎馬民族でもあった。東西をつなぐシルクロードの商人として、長く活躍できた秘密は、ソグド人が騎馬をよくこなす騎馬民族だったことにある。アレキサンダーの中央アジア侵入に頑強に抵抗したスピタメネスは、その娘アパマがセレウコス一世の妻となり、息子のアンティオコス一世が、中央アジアのソグドの文化とギリシャの文化を融合するヘレニズムの旗手となった。スピタメネスと一緒に戦ったソグド人やスキタイだけでなく、東に逃れ、甘粛省の昭武にいて月氏と呼ばれたソグド人だけでなく、広く東アジアに展開したソグド人も多かった。彼らは軍馬の供給者として遊牧民の華北支配に協力し、その中から安祿山も出た。玄宗、楊貴妃の寵愛を得て、のちに反乱し、大燕聖武皇帝を僭称し、息子に殺された。楊貴妃もそのあおりで殺害されたが、最大の被害は、ソグド人の弾圧である。「安史の乱」（755~763）では、揚州のソグド人数千人はじめ8万人のソグド人が粛清されており、754年鑑真と共に来日した揚州のソグド人安如宝は、歴史の狭間で危難を逃れたことになる。シルクロードの交易の主役が、ソグド人からウイグル人に移行する前夜のことだった。

### 【揚州から直線距離で900キロ；福江島にあったソグド人集落/日出国と日出国を繋いだコスモポリタン】

ソグド人といえば、昭武九姓といわれるソグディアナ、ソグド川周辺の月氏を祖先とするソグド人都市が知られる。今はウズベキスタンの領土にあるがタシケント（石国）、サマルカンド（康国）、ブハラ（安国）、キッシュ（史国；チムールが誕生したシャフリサブズ）、マイムルグ（米国、ペンジケント）、クシャーニヤ（何国）、カブーダン（曹国）、パイカンド（畢国）などがあり、ほかに羅、穆、翟などもソグド姓（胡姓）で、九姓は『北史』『隋書』『新唐書』によって異なる。ソグド人は、ソグディアナを出て、キルギス・トクマクにあった碎葉城、西域のトルファン、敦煌にもソグド人集落を有し、中国北西部各地にあったとみられ、中国本土でソグド人の集落があったのは「西安、洛陽、北京、太原、固原、青洲、南京、揚州、広州、福州」（『シルクロード文化を支えたソグド人』菅谷文則）で、ウラジオストクのエルンスト シャフクーノフ氏からウスリースク近くにもソグド人集落があったと聞いた。私は、『肥前国風土記』にある値嘉郷の島（福江島）にもソグド人の集落があったのではないかと夢想する。「馬牛をたくさん飼い、川原浦の港から遣唐使が出発する。この島の漁民は顔かたちは隼人に似て、常に馬上で弓を射ることを好み、その言葉は、土地人の言葉と異なっている」と記しているからだ。遣唐使の起点にソグド人がいるのは自然なことだ。揚州、福州のソグド人集落が視野にあったと想像できるからだ。現代にも通じる交易の要諦、グローバルネットワークを地球上で最初に築いたソグド人は再評価されていい。

### 【タジキスタン料理】

ナン、パラウ（プロフ、ピラフ）、  
タジキスタンの国民的料理の中には、乳製品が多い。クルト（チーズの一種）、  
シュルポ（チョルパ、シオルパ、スープ）  
ラグマン（スープ麺）  
マンティ（饅頭）  
ペリメニ（餃子）  
サモサ（香辛料一杯の具材を皮で包む料理）  
ベリヤシ(ピロシキに似た揚げ物)  
ヨーグルト  
カイマク（発酵乳製品）



柑橘類 ザクロ、杏、スモモ、モモ、リンゴ、ナシ、イチジク、カキ（この項ウィキペディアから）

### 【タジキスタンの伝統音楽】

大野遼は、今は亡き高橋一夫と一緒に、ウズベキスタンのブハラで活動する楽器ギジャックの演奏者で製作者イスマトフ ボホディル氏が主宰するシャシマコムを招聘し、新潟、東京でコンサートを開催し、その後数年にわたって、アジア・シルクロード音楽フェスティバルの常連演奏者として招いたことがある。このシャシマコムがタジキスタンの民族音楽の名前である。ブハラの旧市街に暮らすイスマトフ一族はタジク人であった。高橋と一緒にウズベキスタンのフェルガナ盆地にあるアンディジャンを訪問し、知人の家の自家製のタンドールで焼いたパンを縁台で食べ、アンディジャン市内のイスラムのモスクを訪問したり、公園で曲芸をみたり、アンディジャンの芸能グループにあった。リーダーはウイグル人の女性だった。ホームステイ先の家では、ウズベク人がキルギスとの国境を自由に往来していることも知った。別の日サマルカンドの国際芸能祭で、このウイグル人の女性がスタッフとして働いているのに出会った。私は、その後日本でアジア・シルクロード音楽フェスティバルを通して知り合ったネパールのバンスリ（笛）のパンチャ・ラマ、タブラ（指太鼓）のサラバン・ラマ兄弟、篠笛・三味線の木村俊介、尺八の橋本岳人山それに薩摩琵琶の首藤久美子と一緒にウズベキスタン日本国交 20 周年記念音楽ツアーを実施、テルメズ考古学博物館に展示されているアイルタム出土の楽人像「琵琶を弾く女性」の前で首藤さんの薩摩琵琶演奏を披露したり、サマルカンドのレジスタン広場メドレッセ中庭でブハラ音楽大学の演奏家らとコンサートを行った。ウズベキスタン各地の特色ある舞踊と演奏を聴いて楽器チャン、ドタール、ギジャック、ルバーブ、スルナイ、カルナイ、などに触れたが、これらの楽器はウイグルの友人が演奏する楽器でもあり、『タジクの黄金遺宝』で紹介されているタジキスタンの楽器とほとんど同じだった。この文書でアラブからウイグルまでの民族音楽の体系がマコムやムカムの名前で呼ばれ、ウイグルの 12 ムカムの音楽もアジア・シルクロード音楽フェスティバルでは紹介してきたが、通常チムール朝以後 16 世紀以降発達したと言われていたりするが、私はササン朝の音楽が、アラブ軍の侵入でササン朝が滅んだあと中央アジアで最初のイスラム王朝であるサーマーン朝で発展し、シャシマコムの音楽伝統はサーマーン朝に遡ると妄想している。サーマーン朝の 10 世紀にトルコ系カルルクのカラハン朝がイスラムを受け入れてイスラム王朝に移行、タリム盆地西方のカシュガルで 12 ムカムが形成される。隋唐以前、仏教音楽としてインドの五弦琵琶、ササン朝ペルシャ起源のバルバットを起源とする曲項四弦琵琶が使用されていた。10 年以上アジア・シルクロード音楽祭をプロデュースした経験から、サーマーン朝以降イスラムの音楽体系に移行、整備され、ウイグルで使用されている楽器は、タジキスタン、ウズベキスタン、そしてトルクメニスタンで使用されている楽器とほとんど同じ器種であると受け止めた。

## 【タジキスタン共和国情報】



タジキスタン共和国の国旗（上左）と国章（上右）

首都 ドウシャンベ

元首／大統領 エマモリ ラフモン

首相 コヒル・ラスルゾーダ

公用語 タジク語 共通語 ロシア語

人口 835万2千人

面積 14万3100平方キロ

独立 1991年9月9日

通貨 ソモニ（サーマーン朝の創始者イスマーイール サーマーニーに因む）

祝祭日 重要な祝祭日は、3月20日から22日のナヴルズ（日本の春分の日）。ゾロアスター教起源の重要な日で、「ハラー山の源泉からたぎり落ちる水が地下に潜り、中央州で噴出し、人々を助ける」というカレーズ・カナートを表象する一年の始まり。

もう一つは、9月9日の独立記念日。今年2021年9月9日は、独立30周年を迎える。

『タジクの黄金遺宝』日本語版は独立記念30周年を記念して発行される。

2020年4月 タジキスタン共和国は、国民の名前にロシア風の命名を禁止した。エマモリ ラフモン大統領は2007年に、ラフモノフからラフモンに変更している。ロシア帝国による中央アジア征服が完了したと言われる1880年12月から1881年1月に行われたトルクメニスタンのギョクテベ要塞の戦いから140年ぶりの中央アジアの声のように思える。

○ タジキスタン共和国が中央アジアと共にさらに飛躍し、

多様性に敬意を掲げるシルクロードユニオンが創設されることを祈る。 大野 遼

発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ 発行人：大野遼、江藤セデカ 住所：〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津 6314-1 TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：[paf02266@nifty.ne.jp](mailto:paf02266@nifty.ne.jp) 郵便振替：00190-7-87777 ユーラシアンクラブ お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店 当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ 会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間1口3,000円、学生会員1,000円、賛同会員2,000円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。無断転載を禁ず。

<http://eurasianclub.org/>

Non Profit Organization Eurasian Club

編集後記：多様性に敬意を表しないグローバリズムが地球を覆っているように見える。地球上の今があるのは、少数民族を含め諸民族に負っている。金石併用時代から青銅器時代にかけて男性結社が優勢な国家が形成されてきたことと密接な関係がある。中央アジア史、シルクロード史をもう一度見直すべき時代と考える。川越駅前の本屋で九さんの著作と50年前に出会い、大阪で本物と出会い私の運命は定まった。人類の未来に少しでも貢献できる活動を続けて終わりたい。私の当面の目標は、「多様性に敬意 アジア共生塾」「アジアの通信社」「アジア・シルクロード文化村」の立ち上げにある。寝言に終わらせない。これ以上迂回する時間はなくなった。(お)